

# 萬葉集のツ・ヌ・リ・テアリ・タリ・キ・ケリ

田中 みどり

- 一 萬葉集のツ
  - 二 萬葉集のヌ
  - 三 萬葉集のリ
  - 四 萬葉集のテアリとタリ
  - 四・1 テアリ
  - 四・2 タリ
  - 五 萬葉集のキ
  - 六 萬葉集のケリ
- まとめ

萬葉集において、  
ツは、行為の遂行をあらわす。ある行為が行われたこと、あるできごとが起こったことを強く確認する。また、可能をあらわすベシとともに用いられたツは、そのできごとがおこってしまったことや行為の遂行を確認するものである。  
ヌは、動作やできごとの到達・達成・到来と、その確認である。また、可能をあらわすベシとともに用いられたヌは、そのできごとの達成を確認するものである。  
リは、現存・存続・判断・確述をあらわす。また、状態性語尾ともなり、「了した、その結果、今ある」の意をあらわすものもある。  
テアリは、あるできごとが起こり、そのありかたにおいて、そのものが存在することをいう。  
タリは、存続・状態をあらわす。また、「文やものを贈ってきた、そしてそれが今日の前にある」の意をあらわす。  
キは、古いできごと、以前のできごとを言う。未然形のセは、現在の反実仮想・過去の反実仮想をあらわす。  
ケリは、行為やできごとが起こり、それを確認することばである。さらに、現在のことがらについても確認する用法が生じている。それは、「了だったのだ」という気づきにつながる。また、ケラシは確実だと思ふ推定である。なお、この時代のケリに詠嘆の意味はない。

## 萬葉集のツ・ヌ・リ・テアリ・タリ・キ・ケリ

本稿では、岩波新日本古典文学大系『萬葉集』を底本とした。ただし、訓については、適宜、勘案した。以下、『新大系』と略す。なお、小学館新編日本古典文学全集を『全集』、新潮日本古典集成を『集成』と略す。

○印は歌、◎印は訳（主に新大系の訳をあげたが、筆者が勘案したものも含む）、◇印は引用、※印は筆者の考えをあらわす。

### 一 萬葉集のツ

#### 萬葉集のツ（一字一音）は

未然形	テ	35例
連用形	テ	20例
ほかに、東国語「ト」1例		
終止形	ツ	104例
連体形	ツル	33例
已然形	ツレ	11例
命令形	テ（ヨ）	3例
ク語法	ツラク	2例

#### 未然形 テ

未然形テと訓み得るもの35例のうち

・上接語 動詞

補助動詞

29例

6例（カヌ6）

・助詞が続くもの

16例（バ10、ナ6）

助動詞が続くもの

19例（ム16、東国語セム1、マシ2）

#### テム・テバ

○このしぐれ いたくな降りそ 我妹子に 見せむがために  
黄葉取りてむ（母美知等里氏牟）

〔萬葉十九・4222 掾久米朝臣広縄〕

○山峽に 咲ける桜を ただ一目 君に見せてば（伎美尔弥西氏婆） 何をか思はむ

〔萬葉十七・3967 掾大伴宿祢池主〕

「黄葉取りてむ」は、「黄葉を取つておこう」で、時雨のひどくないうちに動作を確かに行なおうと思っており、「ただ一目 君に見せてば」は、「ただ一目だけでもあなたにお見せしたならば」で、（病氣の所持に）桜の花を一目でも見せたい、それさえすれば、という〈行為の遂行〉である。このような場合、ツには完了の語気が出る。

#### テマシ

○早来ても 見てましものを（見手益物乎） 山背の 高の槻 群 散りにけるかも 〔萬葉 三・277 高市連黒人〕

「早来ても 見てましものを」は「もつと早く来て、見ておけばよかったのに」で、ツは〈行為の遂行〉をあらわす。

○梅の花 今盛りなり 思ふどち かざしにしてな（加射之尔 斯弓奈） 今盛りなり

〔萬葉 五・ 820 梅花歌卅二首〕

「かざしにしてな」は、「髪に挿して飾りにしてしまおう」ということである。今盛りに咲いている梅の花を、かざしに役割を変えよう、ということ、行為の結果、変化がもたらされる。すなわち、これも、ツは〈行為の遂行〉をあらわす。

## 連用形 テ

連用形テと訓み得るもの20例十東国歌1例のうち

・上接語 動詞 19例

補助動詞 1例（カヌー）

ほかに、動詞に東国語ト（||テ）が接するもの 1例

・助動詞が続くもの 20例（キ17、ケリ1、ケム2）

ほかに、東国語ト（||テ）にシ（キ）が続くもの 1例

## テシ

○思はじと 言ひてしものを（曰手師物乎） はねず色の 移

ろひやすき 吾が心かも 〔萬葉 四・ 657〕

「言ひてしものを」は、集成では「口に出して言ったのに」、全集では「言つてはみたが」、新大系では「言つていたのに」と訳されている。ツとキとが接している場合、ツを完了、キを過去、とのみとらえると、ツとキとが並べられている意味が不明確になりやすい。これは、「し（キ）」が、「言つた」のが以前のことであることをあらわし、「て（ツ）」が、確かにその行為がなされたことをあらわすものである。訳は「確かに言つたのに」。ツは〈確言〉である。

## テキ

○思ひにし 余りにしかば すべをなみ 吾は言ひてき（吾者 五十日手寸） 忌むべきものを

〔萬葉十二・ 2947 正述心緒〕

「吾は言ひてき」は、「私は言つてしまった」で、〈行為の遂行〉。「て（ツ）」には取り返しのことかないことをしてしまつたという思いが含まれる。

## テケリ

○あしひきの 八つ峰の椿 つらつらに 見とも飽かめや 植ゑてける君（宇恵弓家流伎美）

〔萬葉二十・ 4481 兵部少輔大伴持属〕

「植ゑてける君」は、「植えたあなた」で、「て（ツ）」

は、「植える」という行為が行われたことを強く確認することば。「ける（ケリ）」は以前のできごとであることを確認することば。

テケム

○我がためと 織女の そのやどに 織る白たへは 織りてけむかも（織豆兼鴨）

「織りてけむかも」は「もう織り上げただろうか」。

「て（ツ）」は「織る」という行為が遂行されたことを言い（織り上げた）、「けむ」は過去のことからの推量である。

## 終止形 ツ

終止形ツと訓み得るもの104例のうち

・上接語	動詞	71例
補助動詞		33例（カネ32、マシ1）
・終止するもの		64例
助詞が続くもの		34例（モ27、ヤ6、カ1）
助動詞が続くもの		6例（ラム4、ベシ2）

## 終止

○鏡なす 吾が見し君を 阿婆の野の 花橘の 珠に拾ひつ

（珠尔拾都）

「拾ひつ」は、集成では「拾いました」、全集では「拾い上げた」、新大系では「拾いました」と訳されている。これらは、ツを完了の意としたものである。

「吾が見し」の「し（キ）」が過去のできごとであるのに対し、今、妹の骨を拾ったことを「つ」であらわす。であるが、それは単に「拾い了えた」ということではない。ツは、「拾った」というできごとを、胸にかみしめることばである。訳は、「拾ったのだった」が適當である。

○引き攀じて 折らば散るべみ 梅の花 袖に扱入れつ（袖尔古寸入津） 染まば染むとも

「袖に扱入れつ」は、「袖にしごき入れてしまった」で、あとの「染まば染むとも」（梅の花の水分がしみだして、袖にしみてしまってもかまわない）を言う前提となっている。ツは、「袖に入れる」という行為を遂行したのだ、ということをも、きっぱり言うことば。

※新大系では梅を白梅と見、第五句を「白い色に染まるなら染まってもよい」と訳す。全集注には

◇色がしみ付くところから、この梅は紅梅かとする説がある。しかし「白つつじ我ににほはね」（二六九四）、「白たへににほはしたるは梅の花かも」（二八五

九) のような例もあり、白梅とみることも可能。

と言う。一六九四歌は美しい白つつじを妻に見せたいために、その色がわたくしに染まってくれというものであり、一八五九歌は山の色を真つ白に染めたのは梅の花かというものである。今の場合は、現実には梅の花が袖を染めるというのである。白梅の白い色が袖を染めることはない。色が染まるというのであれば、紅梅と見るほかに、というのが従来の方である。しかし、「しむ」は色のみでなく、液体・香などがつくことに用いる。

○なかなか 人とあらずは 酒壺に なりにてしかも 酒に染みなむ

〔三・343 旅人〕

のような例も、萬葉集にある。よって、ここは、梅の花の水分が袖にしみると解す。

## ツヤ

○聞きつやと(聞津哉登) 妹が問はせる 雁がねは まこと

も遠く 雲隠るなり

〔萬葉 八・1563 家持〕

「聞きつや」は、集成では「聞きましたか」、全集・新大系では「聞いたか」と訳されている。いずれもツを完了の意としたものである。が、過去形の訳と見分けがつかない。これは、「たしかに聞きましたか」としたほうが、ツの意味がはっきりする。ツは、動作が確かに行なわれたことをあらわす。

## ツラム

○泊瀬の 斎槻が下に 隠したる妻 あかねさし 照れる月夜に 人見てむかも

一に云ふ、「人見つらむか(人見豆良牟可)」

〔萬葉十一・2353〕

「人見つらむか」は「人が見てしまっているのではないだろうか」。もとの歌の「人見てむかも(人見點鴨)」が「人が見てしまうことだろうか」であるのに対し、「見つらむか」のほうは、ラムが現在のことがらの推量である分、取り返しのつかないことが起きているのではないかという疑念を含む。ツは見るという動作が確かに行われたことをあらわす。

集成は、もとの歌「人が見つけてしまうのではなからうか」、一云「人が見つけたであらうか」。全集は、もとの歌「誰か見はしなかつたろうか」、一云「人が見たのではなからうか」。新大系は、もとの歌「人が見はしないだろうか」、一云「人が見ているのではなからうか」と訳す。伊藤博『萬葉集釋注』(集英社 1995年〜1998年 以下「釋注」と略す)では、もとの歌「人が見つけてしまふのではなからうか」、一云「人が見つけているのではなからうか」。いずれも、一云のほうに緊張感のある訳にはなっている。が、ツの意味がはっきりしない。

## ツベシ

○たぶてにも 投げ越しつべき(投越都倍吉) 天の川 隔てればかも あまたすべなき [萬葉 八・1522 憶良]  
 「投げ越しつべき 天の川」は「礫を」投げれば川を越えて向こう岸まで届かせてしまうことができそうなほどに見える天の川だ。(それが…)。ツは可能をあらわすベシとともにあるとき、そのできごとがおこってしまったことや行為の遂行を確認することばである。

## 連体形 ツル

連体形ツルと訓み得るもの33例のうち

・上接語	動詞	30例
形容詞		1例(ナシ1)
補助動詞		2例(カヌ2)
・助詞が続くもの		14例(カモ14)
係助詞の結びのもの		13例(ツ4、カ7、カモ1、東国語ゼ1ソ1)
名詞にかかるもの		4例
動詞を承け、名詞を修飾するもの(逆述語)		1
動詞を承け、目的語を修飾するもの		2
句(SV)を承け、名詞を修飾するもの		1
準体言を形成するもの		1例

連体形で終止するもの

1例

## ツルカモ

○吾がやどの 一群萩を 思ふ児に 見せずほとほと 散らしつるかも(令散都類香聞) [萬葉 八・1565 家持]  
 「ほとほと 散らしつるかも」は、「もう少しで散らしてしまふところだった」で、「ホトホトツ」は取り返しのつかないことが起こることを言う。ツはできごとの遂行をあらわす。  
 ソツル

○玉の浦の 奥つ白玉 拾へれど またそ置きつる(麻多曾於伎都流) 見る人をなみ [萬葉十五・3628]  
 「またそ置きつる」は「また浜に返してしまつたよ」。  
 ツは〈行為の遂行〉。  
 連体修飾

○雲の上に 鳴きつる雁の(鳴都流鴈乃) 寒きなへ 萩の下葉は もみちぬるかも

[萬葉 八・1575 右大臣橘家宴歌七首]  
 ナへは、ある事態が存ると同時に、他の事態が存することをあらわす語である。「雁の声が寒々と聞こえたとともに、庭の萩の下葉が色づいた」。「秋らしくなつた」と言つて、客人を歓迎した歌である。ツはできご

とを強く確認することば。

## 準体言

○ほととぎす 今朝の朝明に 鳴きつるは(鳴都流波) 君聞

きけむか 朝眠か寝けむ [萬葉 十・1949]

「ほととぎす 今朝の朝明に 鳴きつるは」は、「ほととぎすが今朝の明け方に鳴いたのをば」で、「つる(ツ)」は「鳴いた」というできごとが確かに起こったことを確認することば。

## 連体形で終止(詠嘆)

○家島は 名にこそありけれ 海原を あが恋ひ来つる(安我古非伎都流) 妹もあらなくに [萬葉十五・3718]

◎家島とは単に島の名だったけれど、わたくしは妻に恋い焦がれて海原をやつてきたのだった。そこに妻もいないのに。

「家島は 名にこそありけれ」の「コソく已然形」は、逆接をコソで強調する、「コソく已然形」本来の用法の一つ。<sup>(1)</sup>

「海原を あが恋ひ来つる」に係助詞はないが、連体形で終止することで、詠嘆をあらわす。

ツは「来た」という行為が確かに行われたことを、きっぱり言うことば。

全集と新大系とは、「家島とは 名ばかりだった 海原を わたしが恋い慕つて来た その妻もいないのに」(全集、

「家島とは名ばかりだった。海原を私が恋しく思いながら来た妻もいないのに。」(新大系)のように、「あが恋ひ来つる」を「妹」にかかる連体修飾ととらえている。阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』(笠間書院 2006年)2015年 以下「全歌講義」と略す)には、

◇「海原をあが恋ひ来つる」は、「妹」を修飾する。

という注さえ付している。一方、集成は、「家島とは名ばかりであった。遠い海原をひたすら恋い焦がれてやつて来た、妻もいはいないのに。」と、「来つる」を正しく(詠嘆で終止する形)ととらえている。このような終止の形は、「風早の 浜の白波 いたづらに ここに寄せ来る 見る人なしに」(九・1673)など、萬葉にはいくつか見られるものであり、「雀の子をいぬきが逃がしつる。」(源氏若紫)や平安朝和歌の連体形止めにつながっていく。

## 已然形 ツレ

已然形ツレと訓み得るもの11例のうち

・上接語 動詞 11例

・助詞が続くもの 8例(下1、ドモ4、バ3)

原因・理由をあらわすもの 3例

## ツレド

○旅なれば 思ひ絶えても ありつれど (安里都礼杼) 家に  
ある妹し 思ひ悲しも [萬葉十五・3686]

これは、「何とか妹のことを考えないようにしていた」  
「思ひ絶えても」の「も」に、「どうにかこうにか」という気  
持ちがあらわされるけれども、「妹のことが思い出され  
て悲しくなる」で、「つれ(ツ)」は「確かにそう思っ  
ていた」ということをあらわす。

#### ツレドモ

○梅の花 折りも折らずも 見つれども (見都礼杼母) 今夜  
の花に なほしかずけり [萬葉 八・1652]

は、「これまででは、折って見たり、折らずに(枝に咲  
いているのを)見たりして、確かに見たけれど」で、  
「つれ(ツ)」は、「見る」という行為が確かに行われ  
たことをあらわす。

#### ツレバ

○遠音にも 君が嘆くと 聞きつれば (聞都礼婆) 音のみし  
泣かゆ 相思ふ吾は [萬葉十九・4215 家持]

この歌は、家持が、慈母を亡くした藤原二郎を弔問し  
た歌。「聞きつれば」は、「たしかに聞いた」で、「つ  
れ(ツ)」は確認のことば。

#### 原因・理由

○家離り います我妹を 留めかね 山隠しつれ (山隠都礼)

心どもなし

[萬葉 三・471 家持]

家持が亡くなった妻を哀傷して詠んだ歌の一首。「山  
隠しつれ」は、「山深く隠れさせてしまった(妻を葬っ  
たことを言う)ので」「つれ(ツ)」は「行為の遂行」  
で、取り返しのつかないことが起こってしまったこと  
に対する強い気持をあらわす。

#### 命令形 テ(ヨ)

命令形はテヨの形のものの3例

○恋ひ恋ひて 逢へるときだに うつくしき 言尽くしてよ  
(事尽手四) 長くと思はば

「言尽くしてよ」は「十分に言葉をかけてよ」で、  
「て(ツ)」は「行為の遂行」。

#### ク語法

ク語法はツラクの形のものの2例

○あしひきの 山の木末の ほど取りて かざしつらくは (可  
射之都良久波) 千年寿くとそ

「かざしつらくは」は、「挿頭にしたのは」。集成では  
「挿頭にしているのは」、新大系では「挿頭にしてい

[萬葉十八・4136 家持]



るのは」、全集では「髪に挿したのは」と訳している。

ツは遂行で、「挿頭にした」という行為が確かに行使されたことを言う意図を込めたものである。「挿頭にしている」では、ツの意味がでない。

## カネツ・カネツモ・ソツル

ツで終止するもの64例中9例がカネツ、ツにモが接するもの27例中23例がカネツモの形である。また、係助詞ソの結びで、ソツルの形のもが1例ある。

○世の中を 憂しとやさしと 思へども 飛び立ちかねつ（飛立可称都） 鳥にしあらねば

〔萬葉 五・893 山上憶良〕

「飛び立ちかねつ」は「飛び立つこともできないのだ」。

○妹が門 行き過ぎかねつ（去過不勝都） ひさかたの 雨も 降らぬか そをよしにせむ

〔萬葉十一・2685 寄物陳思〕

「行き過ぎかねつ」は「素通りすることができないよ」。

893歌、2685歌などのツは、完了をあらわすのではなく、飛び立ちたい、妹に会いたい、という思いを遂げることができないことへの焦燥の気持ち、強

く確認することばである。

○洗ひ衣 取替川の 川淀の 淀まむ心 思ひかねつも（思兼都母） 〔萬葉十二・3019 寄物陳思〕

「淀まむ心 思ひかねつも」は、「淀んでどこおつてしまうような気持ちにはとてもなれませんよ」。

○物思ふと 人に見えじと なまじひに 常に思へり ありそ かねつる（在曾金津流）

〔萬葉 四・613 山口女王〕

◎もの思いをしていると人にしられまいと いつもいつも無理につとめています。それで、とても生きていられない気持ち（死んでしまいう）です。

「ありそかねつる」は「生きていられない気持ちです」。

一般に、カヌの訳は、「くすることができない」にとどまっているが、躊躇・不可能・困難の意をあらわすカヌは焦燥をあらわすことばである。そのカヌとともに用いられたツは、「くのだ」という強い確認のことばである。ヘソく連体形のもの、さらにそれを強めた表現であり、モは詠嘆をことばにあらわしたものの。

釈注の893歌「飛び立ちかねつ」の注に、

◇「かね」は、くしようにもどうしてもくすることができない、の意。「つ」は「かね」を強める助動詞。

とある。が、ツが強めるのはカネではなく、句全体である。

以上、萬葉集のツは、

行為の遂行をあらわす

ある行為が行われたこと、あるできごとが起こったことを強く確認する

ある行為が行われたことをきっぱり言う

取り返しがつかないという気持をあらわす

で、行為の遂行やできごとが起こってしまったことに対する、強い気持を含むものが多い。

また、

可能をあらわすベシとともに用いられたツは、そのできごとがおこってしまったことや行為の遂行を確認するものである

## 二 萬葉集のヌ

萬葉集のヌ（一字一音）は

未然形	ナ	60例
連体形	ニ	207例
終止形	ヌ	182例
連体形	ヌル	9例

已然形      ヌレ      14例

ク語法      ヌラク      1例

## 未然形 ナ

未然形ナと訓み得るもの60例のうち

・上接語      動詞      60例

・助詞が続くもの      26例（バ24、ナ2）

助動詞が続くもの      34例（ム31、マシ3）

## ナバ

○梅の花      咲きて散りなば（佐企弓知理奈婆）      桜花      繼ぎて  
咲くべく      なりにてあらずや

〔萬葉 五・829 梅花歌卅二首〕

「咲きて散りなば」は、「咲いて散ってしまったならば」で、「な（ヌ）」は「散る」ということの達成を確認することは。

## ナム

○吾がやどに      蒔きしなでしこ      いつしかも      花に咲きなむ  
（花尔咲奈武）      なそへつつ見む      〔萬葉 八・1448〕  
「いつしかも      花に咲きなむ」は「いつになったら花が咲くだろうか」で、「な（ヌ）」は、花が咲くことの到来を確認することは。

ナマシ

○遠妻し 高にありせば 知らずとも 手綱の浜の 尋ね来な  
まし(尋来名益) [萬葉 九・1746]

「遠妻し 高にありせば：尋ね来なまし」は反実仮想。  
「遠くにいる妻がもしも高にいたならば、：尋ねて来  
るものを」で、「な(ヌ)」は、「尋ねて来る」ことの  
達成を確認することば。

ナナ

○秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに 君に寄りなな(君尔  
因奈名) 言痛くありとも

[萬葉 二・114 但馬皇女]<sup>③</sup>

「君に寄りなな」は、「あなたに心をよせましよう」。

「な(ヌ)」は「あなたに心を寄せる」ことの達成を  
確認することば。

以上ナはある行為やあるできごとの到来・到達・達成を確  
認する意。

## 連用形 二

連用形ニと訓み得るもの207例のうち

・上接語 動詞 206例

補助動詞

1例(マス1)

・助詞が続くもの 11例(ツツ5、テ5、テアリ1)

助動詞が続くもの

196例(キ41、ケリ133、東国語カリケ  
リ1、ケム11、ケラシ8、タリ2)

ニキ

○山吹の 花とり持ちて つれもなく 離れにし妹を(可礼尔  
之妹乎) 偲ひつるかも

[萬葉十九・4184 留女の女郎]

「離れにし妹」は、「離れる」ということが到来した  
「に」のが以前のことであり(「し」、その後に、  
その妹を「偲」ぶという行為をした(「つる」、と言  
う。

ニセバ

○十月 雨間も置かず 降りにせば(零尔西者) いづれの里  
の 宿か借らまし [萬葉十二・3214]

◎十月の雨が、止む時もなく降ったとしたならば、いったい、  
どの里の宿を借りて雨宿りしたらよいのであろうか。

「降りにせば」は「雨が降りはじめるとしたならば」  
で、「に(ヌ)」は「雨が降る」ことの達成の確認。  
《セバ：マシ》は反実仮想の形式であるが、この場合  
セに過去の意味はなく、反実をあらわす語となってい  
る。

《セバ：マシ》のセは、過去の助動詞キである。萬葉集で

は、セに過去の意味のあるものと、現在の反実をあらわすものとがある。

○古に 梁打つ人の なかりせば（無有世伐） ここにもあらまし 柘の枝はも（三・387）

○昔、梁を仕掛けた人がなかったならば、今もここにあるであろう柘の枝よ。

は、セが過去の意味をもっている例である。<sup>(4)</sup>

## ニケリ

○春雨に 争ひかねて 吾がやどの 桜の花は 咲きそめにけり（開始尔家里）  
〔萬葉 十・1869〕

「咲きそめにけり」の「に（ヌ）」は、「咲き初む」ということの到来を言うことば。「けり」は、その結果を確認することば。

○我妹子は 常世の国に 住みけらし 昔見しより をちましにけり（変若益尔家利）

〔萬葉 四・650 大伴宿祢三依〕  
○恋しけば 形見にせむと 吾がやどに 植ゑし藤波 今咲きにけり（今開尔家里）

〔萬葉 八・1471 山部宿祢赤人〕

○竹敷の 黄葉を見れば 我妹子が 待たむと言ひし 時そ来にける（等伎曾伎尔家流）  
〔萬葉十五・3701〕

650歌の「昔見しより をちましにけり」と、47

1歌の「植ゑし藤波 今咲きにけり」とは、昔と今の対比である。650歌は「昔見たこと」を、1471歌は以前に「藤を植えた」ということを「し（キ）」であらわし、それと較べて現在には若さがました、今咲いた、という。キは、現在には続かない古いできごとをあらわす。「に（ヌ）」は「をち益す」「咲きそむ」という事態の達成を言うことば。3701歌の「時そ来にける」は「その時が到来した」ことを述べる。ヌは到来である。いずれもケリは確認。

## ニケム

○帰り来て 見むと思ひし わがやどの 秋萩すすき 散りにけむかも（知里尔家武可聞）  
〔萬葉十五・3681〕

「散りにけむかも」は「もう散ってしまっただろうか」で、「に（ヌ）」は「散る」ことが達成していることを言う。ケムは「散りはじめたこと」が以前のことと、それを推量する意。

## ニケラシ

○桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市潟 潮干にけらし（塩干二家良之）  
鶴鳴き渡る  
〔萬葉 三・271〕

「潮干にけらし」は「潮が干たらしい」で、「に（ヌ）」は「潮が干る」ことが達成されたことを言う。ケラシは、過去の推量。

## ニテアリ

○梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりにて  
あらずや (都伎弓佐久倍久 奈利尔弓阿良受也)

〔萬葉 五・829 梅花歌卅二首〕

◎梅の花が、咲いて散ってしまうと、つづいて桜の花が咲きそうになっているではないか。

「継ぎて咲くべく なりにてあらずや」は「続いて咲きそうになってあるではないか」。「に(ヌ)」は「咲きそうになる」ことの達成を言うことば。テアリは事態が現在に在ることを言う。

## ニタリ

○常人の 恋ふといふよりは 余りにて われは死ぬべく なりにたらずや (奈里尔多良受夜)

〔萬葉十八・4080 大伴坂上郎女〕

「われは死ぬべく なりにたらずや」は「わたくしは死にそうになっているではありませんか」で、「に(ヌ)」は「死にそうになる」ことの達成を言う。タリは状態をあらわす。

## ニツツ

○天の川 瀬を速みかも ぬばたまの 夜はふけにつつ (夜者 関尔乍) 逢はぬ彦星

〔萬葉 十・2076〕

「夜はふけにつつ」は「夜がふけてしまっていないが

## ニテ

ら」で、「に(ヌ)」は「夜がふける」ことが達成されたことを言う。ツツは二つの動作が並行して行われることを示し、今の場合、「夜がふける」とと彦星が織女に逢わないでいる」とことが並べられているのであるが、ふたつの事柄が相反する事柄であるという前提から、逆接の意となる。

○去年の春 逢へりし君に 恋ひにてし (恋尔手師) 桜の花は 迎へ来らしも

〔萬葉 八・1430〕

「恋ひにてし」は「恋してしまつて」で、「に(ヌ)」は「恋すること」に陥つてしまったことを言う。

集成「去年の春お逢いしたあなたを恋慕って、桜の花は…」、全集「去年の春 お逢いした君を 恋慕って

桜の花は…」、新大系「去年の春にお逢いした君に恋慕かかれていた桜の花は、…」。いずれも、ヌの意味を訳出していない。また、新大系の訳は第三句までが「桜の花」を修飾する形になっている。ところが、新大系の注には、

◇第三句「恋ひにてし」は、「恋ひぬ」の連用形「恋ひに」に助詞「て」と「し」が接続した形。「し」は歌末の

「らしも」と呼応している。

とあって、訳と注とに矛盾がある。また、全歌講義は「にてし」の「に」は完了の助動詞ヌの連用形、「て」は完了

の助動詞ツの連用形、「し」は過去の助動詞キの連体形、  
と言っており、「にてし」は、完了の助動詞・完了の助動  
詞・過去の助動詞のつながりということになっている。こ  
のような語構成は考えられない。シは助詞であって、新大  
系の注の言うように、第五句の「らし」と呼応するもので  
ある。<sup>(5)</sup>

## 終止形 ヌ

終止形ヌと訓み得るもの182例のうち

・上接語 動詞 178例

補助動詞 2例 (マス1、タマフ1)

「申したまふ」「たまふ」

が尊敬の意をあらわさ

ない)が接するもの1例

助動詞 1例 (ス1)

・終止するもの 130例

助詞が続くもの 30例 (ヤ1、ヨ1、カモ3、東国語カム11

カモ1、副助詞ガニ4、トモ9、ヲ

1、ト10)

助動詞が続くもの 22例 (ラシ9、ラム6、ベシ7)

ヌで終止するもの

○熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ (潮毛可  
奈比沼) 今は漕ぎ出でな [萬葉 一・ 8 額田王]  
「月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな」は「月  
の出を待っている」と、潮も船出にちようどよくなつて  
きた。さあ漕ぎ出そう」で、ヌは潮流の具合がよくな  
ることの達成。

ヌトモ

○青柳 梅との花を 折りかざし 飲みての後は 散りぬとも  
よし (知利奴得母与斯)

[萬葉 五・ 821 梅花歌卅二首]

「散りぬともよし」は「散つてしまおうともよい」。

ヌは「散る」ことの達成。

ヌラシ

○うちなびく 春立ちぬらし (春立奴良志 吾が門の 柳の  
末に うぐひす鳴きつ [萬葉 十・1819 詠鳥]

○今よりは 秋づきぬらし (安伎豆吉奴良之) あしひきの

山松陰に ひぐらし鳴きぬ [萬葉十五・3655]

1819歌は「うぐひす鳴きつ」を根拠に「春立ち  
ぬ」を推定している。「うぐひす鳴きつ」は鶯が鳴く  
ことがたしかに起こったことをツであらわし、「春立  
ちぬ」は春が到来したことをヌであらわしている。

3655歌は「ひぐらし鳴きぬ」を根拠に「今よりは

秋づきぬらし」を推定している。ひぐらしが鳴くことを達成した（ひぐらしが鳴くようになった）ことをヌであらわし、秋の到来をヌであらわしている。

ヌラム

○ひさかたの 天の露霜 置きにけり 家なる人も 待ち恋ひぬらむ（待恋奴濫）〔萬葉 四・651 大伴坂上郎女〕  
「待ち恋ひぬらむ」は「きつと帰りを待ち焦がれているだろう」で、必ずそのことが起こっていることを確信している。現在の推量ラムとともに用いられたヌは、達成の確認である。

ヌベシ

○草枕 旅行く人も 行き触れば にほひぬべくも（尔保比奴倍久毛） 咲ける萩かも

〔萬葉 八・1532 笠朝臣金村〕

「にほひぬべくも 咲ける萩かも」は「色が染まつてしまいうようなほどに咲いている萩であることだ」。

「ぬ」は「色が染まる」ことの達成を確認することば。ツの項に、「可能をあらわすベシとともに用いられたツは、そのできごとがおこってしまったことや行為の遂行を確認するものである。」と述べた（177頁）。ヌの場合にも、可能をあらわすベシとともに用いられたヌは、そのできごとの達成を確認するものとなる。

ヌガニ

○秋づけば 水草の花の あえぬがに（阿要奴蟹） 思へど知らじ 直に逢はざれば 〔萬葉 十・2272〕  
「あえぬがに」は「花がこぼれ落ちてしまえばかりに」。「ぬ」は「花がこぼれ落ちる」ことの達成を確認することば。これも、右の「ヌベシ」の「ヌ」に準ずる。

## 連体形 ヌル

連体形ヌルと訓み得るもの9例のうち

・上接語 動詞

9例

・係助詞の結びのもの

4例（ソ1、ヤ2、カ1）

名詞にかかるもの

3例

動詞を承け、名詞を修飾するもの（逆述語）

2

句（SV）を承け、名詞を修飾するもの

1

トキが続くもの

1例

モノが続くもの

1例

## 連体修飾

○悔しくも 満ちぬる潮か（満奴流塩鹿） 住吉の 岸の浦廻ゆ 行かましものを 〔萬葉 七・1144〕  
「満ちぬる潮か」は、「潮が満ちてきたことだ」。「ぬ

る(ヌ)は、潮の満ちることの達成。

トキに続くもの

○ひぐらしの 鳴きぬる時は(奈吉奴流登吉波)をみなへし  
咲きたる野辺を 行きつつ見べし

〔萬葉十七・3951 大目秦忌寸八千嶋〕

◎ひぐらしの鳴くようになった時節には、女郎花が咲いている  
野辺をそぞろ歩いて、花を見るのがよいでしょう。

「ひぐらしの 鳴きぬる時は」は「ひぐらしの鳴くよう  
うになった時節には」で、「ぬる(ヌ)」はその時節の  
到来を言う。

集成「ひぐらしの鳴いているこんな季節には」、全集「ひ  
ぐらしの 鳴く時などは」、新大系「ひぐらしの鳴いてい  
る時には」。いずれも、ひぐらしが鳴く季節に入っている  
ことをあらわしているが、ヌの意味を訳出していない。

## 已然形 ヌレ

已然形ヌレと訓み得るもの14例のうち

・上接語 動詞

14例

・助詞が続くもの

10例(バ7、ド2、ドモ1)

原因・理由をあらわすもの

4例

原因・理由をあらわすもの

○:やくやくに かたちつくほり 朝な朝な 言ふこと止み

たまきはる 命絶えぬれ(伊乃知多延奴礼) 立ち躍り 足

すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる わが子飛ば  
しつ 世の中の道

「命絶えぬれ」は「命が絶えてしまったので」。「ぬれ

(ヌ)」は「命が絶える」ことの到達をあらわす。

## ク語法 ヌラク

○草枕 旅に久しく あらめやと 妹に言ひしを 年の経ぬら  
く(等之能倍奴良久)

〔萬葉十五・3719〕

「年の経ぬらく」は「年を経ってしまったことだ」で、

「ぬ」は「年を経た(年を越した)」ことの達成を確  
認することば。

## ツとヌ

鳴キツと鳴キヌ

○うちなびく 春立ちぬらし 吾が門の 柳の末に うぐひす

鳴きつ(罵鳴都)

〔萬葉 十・1819 詠鳥〕

○今よりは 秋づきぬらし あしひきの 山松陰に ひぐらし

鳴きぬ(日具良之奈伎奴)

〔萬葉十五・3655〕

右にも述べたように、1819歌の「うぐひす鳴き  
つ」はたしかに鶯が鳴くことが起こったことをツであ



らわし、3655歌の「ひぐらし鳴きぬ」はひぐらしが鳴くことを達成した（ひぐらしが鳴くようになった）ことをヌであらわしている。同じ「鳴く」という動詞に接していても、「鳴きつ」と「鳴きぬ」とでは、あらわす内容がまったく異なるのである。

3655歌を新大系「ひぐらしが鳴き始めた」、全集「ひぐらしが鳴き始めた」と訳している。これはまだ、達成に近い。が、集成「ひぐらしがしきりに鳴いている」は、状況は間違いがないのであるが、ヌの意味から遠くなってしまう。

新大系の注には、

◇「鳴きつ」は、「鳴きぬ」とは小異があり、「鳴いている」という状態を表している。

と言うのであるが、ツは意志的な行為・ヌは自発的な行為とする次項（十八・4119）の説明とどのように関わるのであろうか。歌によって説明を変えている、と考えられる。

また、

○古よ 偲ひにければ（之怒比尔家礼婆） ほととぎす 鳴く  
声聞きて 恋しきものを

〔萬葉十八・4119 聞霍公鳥喧作歌一首 家持〕

では、ヌはほととぎすを「偲ぶ」という思いに成り至ったことを言う。ケリは以前のできごとの確認である。「昔から、ほととぎすの声を慕うようになっていたのだ」。

新大系の注には、

◇越中において、ホトトギスの鳴く声を聞くという内容の題詞を持つ歌が、家持をはじめ周辺に多い。「偲ひにければ」とあるが、「かけて偲ひつ」（六）、「偲ひつるかも」（三八四九）など、「偲ふ」は完了の助動詞では「つ」をとり「ぬ」はとらないのが普通。ここは「ぬ」をとることで、「偲ふ」を意志的な行為ではなく自発的な行為として表現したものか。あるいは、どうしても「つ」をとるとすれば「偲ひてければ」となるうが、「てけり」は万葉集には「聞きてけるかも」（二八五五）と「植ゑてける君」（四四八二）の二例しかない。もととは「偲ひ来にけれ」（四一四七）、あるいは「偲ひにすれば」などであったものであろうか。今は誤字説に拠らず、諸本のままとしておく。そもそも結句に「恋しきものを」とある場合には、「過ぎてや行かむ恋しきものを」（二一七四）のように反語表現を承けるのが通例（他に二三五〇・一九二三・二二九七・二九七七）。

と言う。これは、ツ・ヌを完了の助動詞と考え、ツは

意志的な行為に、又は自発的な行為に対して言うものとする説に拠ったものである。しかしながら、ツ・ヌはともに完了であるのではない。ツはへでぎごとが一度起こったことゝを、又はへでぎごとが達成されたことゝをいうことばである。「偲ひつ」は「偲ぶ」というでぎごとが一度起こったということゝを、「偲ひぬ」は「偲ぶ」ということが心の中に醸成されたことを言う。同じ動詞であつても、ツに接する場合とヌに接する場合とは、意味がまったく異なるのである。

全集注には

◇恋しきものを―このモノヲは詠嘆的文末用法

と言ひ、

◎昔から 賞でてきたので ほととぎすの 鳴く声を聞く

と 懐かしいことよ

と訳すが、新大系では、

◎昔からずつと慕つて来たので、ホトトギスの鳴く声を聞いて恋しく思うものなのだが。

と訳している。新大系注に

◇そもそも結句に「恋しきものを」とある場合には、「過ぎてや行かむ恋しきものを」（二一七四）のように反語表現を承けるのが通例

と言うように、ここは、反語表現はないが、逆接表現

であることは確かである。また、全集でも新大系でも「恋しき」ものは、ホトトギスであるように読み取れる。ところが、集成では、

◎都に住んでいた昔からずつと賞でてきたので、時鳥が今しも鳴く声を聞くと、かえつて都恋しい気持ちでいっばいになる。

と訳し、恋しいのが都であると言っている。このように解釈すると歌意が明確になるが、都をもつてくるのは無理がある。やはり、恋しいのはホトトギスであろう。すなわち、訳は、

◎昔から、ほととぎすの声を慕うようになっていたので、その鳴く声を聞くと恋しいものなのに。（心が晴れない）となる。

以上、萬葉集の又は

動作やでぎごとの到達・達成・到来と、その確認である

また、

可能をあらわすベシとともに用いられた又は、そのでぎごとの達成を確認するものである

### 三 萬葉集のり

萬葉集のり（一字一音）は

未然形	ラ	5例
連用形	リ	8例
終止形	リ	8例
連体形	ル	103例
ほかに、東国語「告らろ」（十四・3469）   告れる1例		
「降らる」（十四・3351）   降れる1例		
「乾さる」（十四・3351）   乾せる1例		
「着る（カル）」（二十・4431）   着る（ケル）1例		
已然形	レ	16例
命令形	レ	2例
ク語法	ラク	2例

りについては、拙稿「へり」に就いて（1980年『佛敎大学研究紀要』通卷六十四號）に少しく述べた。中に、相違する点があるが、これは、新しく正したものである。

### 未然形 ラ

未然形ラと訓み得るもの5例のうち

- ・上接語 動詞 5例
- ・助詞が続くもの 2例（バ2）
- ・助動詞が続くもの 2例（ム1、マシ1）
- ・ナクニが続くもの 1例

### 卷第十八・4126

○天の川 橋渡せらば（波志和多世良波） その上ゆも い渡らさむを 秋にあらずとも 「萬葉十八・4126 家持」に、「橋渡せらば」がある。拙稿「記紀風土記のツ・ヌ・リ・タリ・キ・ケリ」（『京都語文21号』77頁）の中で、記54歌謡

○山方に 蒔ける青菜も（麻祁流阿哀那母） 吉備人と 共にし摘めば 楽しくもあるか 「記 54」

の「山方に蒔ける青菜…」は「蒔いた結果、今生えている」ことをいうものであり、大阪弁の、「蒔いたある」と訳するのが適當であるとし、紀39歌謡

○櫃の生に 横白を作り 横白に 醸める大御酒（伽綿蘆淤朋瀨根） うまらに 聞しもち食せ まろが父 「紀 39」

の「醸める大御酒」は「醸して、ある」ことをいい、やはり大阪弁の「醸したある」と訳するのが適當であると述べた。ここも同じで、「橋が渡したあったならば」と訳するのが最適である。

## 連用形 リ

連用形リと訓み得るもの8例のうち

・上接語 動詞

8例

・助動詞が続くもの

8例(キ7、ケリ1)

○うぐひすの 鳴きし垣内に にほへりし(尔保敵理之 梅

この雪に うつろふらむか 『萬葉十九・4287 家持』

○なでしこは 秋咲くものを 君が家の 雪の巖に 咲けりけるかも(左家理家流可母)

『萬葉十九・4231 掾久米朝臣広縄』

4287歌の、「鳴きし」「にほへりし」は以前に訪れたときのことであり、今降る雪にその梅が散っているさまを想像している。4231歌は、秋に咲くなでしこが、雪の季節に咲いているのを見て、驚いている。リ(アリ)は目の前で梅が咲いていること、なでしこが咲いていることをあらわす。キは以前のできごとであり、ケリはできごととの確認である。

## 終止形 リ

終止形リと訓み得るもの8例のうち

・上接語 動詞

8例

・終止するもの

5例

助詞トが続くもの

2例

「見ユ」が続くもの

1例

## 卷十五・3615

○わがゆゑに 妹嘆くらし 風早の 浦の沖辺に 霧たなびけ

リ(奇里多奈妣家利) 『萬葉集十五・3615』

「霧たなびけり」は、「霧がたなびいている」。このテイルは、状態をあらわすものではなく、未然形の項でも述べたテアルで、たなびく霧の存在を視覚的に描写したものである(たなびいたある)。

## 終止形のうち、

○ひさかたの 月は照りたり 暇なく 海人のいざりは 灯し

あへり見ゆ(等毛之安敵里見由) 『萬葉十五・3672』

「灯しあへり見ゆ」は、拙稿「リ」についてに述べた如く、

○わが背子を あが松原よ 見渡せば 海人娘子ども 玉藻刈る見ゆ(多麻藻可流美由)

『萬葉十七・3890 三野連石守』

のような「動詞終止形+見ゆ」の形のものと同価で、リはあってもなくても意味は変わらない。「SP」見ユ」は「SP」。それが見える。」ほどの意味であって、SP、

P>と「見ゆ」とは対々の重みをもち、「見ゆ」はへS・P>を見た感動を今一度観入する形で、自身が現場に立ち合うことを表明するものである。すなわち、リ／アリが、へS・P>を

### へS・P>アリ

と判断し、更に客体化するに向かう働きをにない、それを言表している語であることを示す（「ガ在る」が内的思念の中での存在へ判断>をあらわすというとき、それは「デアル」に転換する）。

## 連体形ル

連体形ルと訓み得るもの103例十東国語4例のうち

・上接語	動詞	107例
継続態の「散らへる」	1例「流さへる」	1例、含む
・助詞が続くもの		2例（ヲ1、カモ1）
疑問の副詞の結びのもの	1例（ナニストカ1）	
係助詞の結びのもの	9例（ソ3、ヤ2、ヤモ1、カ1、カモ2）	
名詞にかかるもの	81例	
動詞を承け、名詞を修飾するもの（逆述語）		42
動詞を承け、目的語を修飾するもの		8
句（SV）を承け、名詞を修飾するもの		31
トキが続くもの	2例	

ウへが続くもの

1例

モノヲが続くもの

1例

準体言

5例

連体形で終止するもの

1例

状態性語尾

4例

○雪の色を奪ひて咲ける（有婆比呂佐家流）梅の花今盛りなり 見む人もがも [萬葉 五・850]

の、「咲ける」は、「咲く」が動作性の動詞であるのに対し、「花が咲いて、在る」という状態性の意味あいをもつ。

○さどはせる（左度波世流）君が心のすべもすべなさ

[萬葉十八・4106 家持]

○鷹はしもあまたあれども…これをおきて またはありがたし さ馴らへる（左奈良敵流）鷹はなけむと 心には思ひ誇りて… [萬葉十七・4011 家持]

の「さどはせる（迷いのある）」「さ馴らへる（馴れた）」も状態をあらわす。

さらに進んで、

○…道に逢はさば 色着せる（伊呂雅世流）菅笠小笠 吾がうなげる（吾宇奈雅流）玉の七つ緒 取り替へも 申さむものを 少なき 道に逢はぬかも [萬葉十六・3875]

の場合、「吾がうなげる」は「わたくしが首にかけている」で、「る（アリ）」は存続であるが、「色着せる」は「色をつけた」で、「る（アリ）」は状態であり、また、動作主は問題ではない。

次に、巻第十八・4082

○天離る 鄙の奴に 天人し かく恋すらば 生ける験あり

（伊家流思留事安里） 「萬葉十八・4082 家持」

の「生ける」は「生きて在る」で、「る（アリ）」には存在の意味がある。

釋注に、十八・4080「常人の 恋ふといふよりは 余りにて われは死ぬべく なりにたらずや」（坂上郎女）をあげて、

◇「生ける」は四〇八〇の「死ぬ」に対する。

と言っている。「生く」と「死ぬ」とを対比させるのではなく、「生ける」と「死ぬ」とを対比させていることは大きな意味をもつ。この場合の「死ぬ」に対するのは、「生きて在る」ことであるからである。

この動作主は「わたくし」であるが、

○白玉の 見が欲し君を 見ず久に 鄙にし居れば 生けると

もなし（伊家流等毛奈之） 「萬葉十九・4170 家持」

の「生ける」は「生きてある（気）」。こちらは、あえて動作主をもとめるとするならば「ひと」ということになるが、

「生ける」は一語的で、「る（アリ）」は状態をあらわす語尾的ですらある。

○銀も 金も玉も 何せむに 優れる宝（麻佐礼留多可良）  
子にしかめやも 「萬葉 五・803 憶良」

の「優れる」は「優れた」で、ほとんど一語化して、「る（アリ）」は「優る」の状態をあらわす語尾となっている。

○水沫なす 仮れる身そとは（可礼流身曾等波） 知れれども  
なほし願ひつ 千歳の命を 「萬葉二十・4470 家持」

の「仮れる」は「仮の」で、やはり、「仮れる」は一語化して、「る（アリ）」は「仮る」の状態をあらわす語尾となっている。

以上の、「色着せる」（十六・3875）・「生ける」（十九・4170）・「優れる」（五・803）・「仮れる」（二十・4470）の4例は、先行する動詞が状態性の動詞であつて、ル（アリ）は状態をあらわす語尾と考えてよい。これは、現代語で、「とがった鉛筆」「とがっている鉛筆」などと言う場合の「タ」「テイル」にあたる。

また、

○立山に 降り置ける雪を（布里於家流由伎乎） 常夏に見  
れども飽かず 神からならし 「萬葉十七・4001 家持」

○立山に 降り置ける雪の（布理於家流由伎能） 常夏に消

ずてわたるは 神ながらとそ [萬葉十七・4004 家持]

は「降り積もっている雪」で、これは存続ではなく、「降り積もった、その結果、今アル」である。さきにも述べた「降りつもったある」の訳があたるが、これは、後の「書けり」などが、「書いた、その結果、今読みとれる」の意になつていくものの先駆である。

○そのころ、また同じ物忌しに、さやうの所に出で来るに、二日といふ日の昼つ方、いとつれづれまさりて、ただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、仰せ言のあれば、いとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。「…」とあり。

〔枕草子 三月ばかり物忌しにとて（全集『枕草子』四三五頁）〕

## 已然形 レ

已然形レと訓み得るもの16例のうち

・上接語 動詞	16例
・助詞が続くもの	14例（パ6、ド5、ドモ3）
原因・理由をあらわすもの	1例
係助詞の結びのもの	1例（シ1）

○川渚にも 雪は降れれし（雪波布礼々之） 宮の内に 千鳥

鳴くらし 居む所なみ [萬葉十九・4288 家持]

は、已然形「降れれ」にシが接したものである。

※このシは、ヌの連用形ニの〔注5〕でもふれたが、新大系注

◇第二句の「降れれし」は、「降れり」の已然形「降れれ」に強意の助詞「し」が付いた形。

にあるように、一般には「強意の助詞」と説明されるものであるが、集成注に、

◇雪は降れれし 「降れれ」は、「降る」に完了の助動詞

「り」の已然形「れ」の添った形。「降れれば」の意。

「し」は係助詞で、第四句の「らし」に呼応する。

と、係助詞としているのが注意をひく。卓見である。「シ」ラシ」（雪波布礼々之）智杼利鳴良之に呼応が認められるので、このシを係助詞として掲げた。

## 命令形 レ

命令形レと訓み得るもの2例のうち

・上接語 動詞	2例
・命令のもの	2例

○白たへの あが下衣 失はず 持てれわが背子（毛弓礼和賀世故）直に逢ふまでに [萬葉十五・3751]

「持てれわが背子」は「持っていてください、あな

た」で、「れ（アリ）」は、身につけて持っていることをあらわす。

○秋さらば わが船泊てむ 忘れ貝 寄せ来て置けれ（与世伎  
弓於家礼） 沖つ白波 〔萬葉十五・3629〕

◎秋になったならば、わたくしたちの船が戻ってきて、この浜に停泊しましょう。忘れ貝を寄せてきて、置いておいてください、沖の白波よ。

この場合、「れ（アリ）」は「ておく」の訳となる。

## ク語法

ク語法ラクと訓み得るもの2例のうち

・動詞を承けるもの

2例

○：己が身し 労はしければ 玉梓の 道の隈廻に 草手折り  
柴取り敷きて 床じもの うち臥い伏して 思ひつつ 嘆き  
伏せらく（奈宜伎布勢良久） 国にあらば：命過ぎなむ 一に  
云ふ、「わが世過ぎなむ」 〔萬葉 五・886 憶良〕

「思ひつつ 嘆き伏せらく」は、「次のようなことを  
思いながら、嘆き臥せている」である。このあとの  
「国にあらば：命過ぎなむ」が「思ふ」ことの内容で  
あるので、通常であれば、「嘆き臥しつつ 思へらく」  
の語順となるところであるが、音数の関係と、その直

前の「うち臥い伏して」と「嘆き臥しつつ」の重複を  
避けるため、このような言葉づかいとなったものであ  
ろう。萬葉集の中では、ほかに例を見ない語構成であ  
る。

以上、萬葉集のりは、  
現存・存続・判断・確述をあらわす  
また、

状態性語尾ともなり、「くした、その結果、今ある」  
の意をあらわすものもある

## 四 萬葉集のテアリとタリ

### 四・1 テアリ

萬葉集のテ+アリ（一字一音）は

テアラ	3例
ほかに、テシアラバ	1例
テアリ	0例
ほかに、テモアリツレド	1例
テアリ	0例
テアル	3例



テアレ

5例

ほかに、テハアレド

1例

テハアレドモ

1例

テアリと訓めるものの中に、二十テアリの形のものが3例ある。

○梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりにて  
あらずや (奈利尔弓阿良受也)

〔萬葉 五・829 梅花歌卅二首〕

○…老いにてある (老尔弓阿留 我が身の上に 病をと 加へてあれば 昼はも 歎かひ暮らし 夜はも 息づき明かし 年長く 病みし渡れば…)

〔萬葉 五・897 目錄に憶良とある〕

○まつがへり しひにてあれかも (之比尔弓安礼可母) 山田の 翁がその日に 求めあはずけむ

〔萬葉十七・4014 家持〕

これらは、「なりにてあらずや」||8音、「老いにてある」||6音、「しひにてあれこそ」||8音のように、いずれも字余りになっている。7音・5音にしようと思えば、次項のタリを用いることもできそうであるが、あえて8音・6音でテアリを用いたのは、テアリと、それが熟合してできたタリとは、いまだ別物で、熟合したタリは存続の意味になる

のに対して、熟合する前のテアリには、いまだアリに実質的な存在の意味があつたからにほかならない。

また、右に掲げたように、テとアリとの間にシ・モ・ハなどの助詞の入るものがある。

○遠江 志留波の磯と 尔閑の浦と 合ひてしあらば (安比弓之阿良婆) 言も通はむ 〔萬葉二十・4324 防人歌〕

○旅なれば 思ひ絶えても ありつれど (於毛比多要弓毛 安里都礼杼) 家にある妹し 思ひ悲しも

〔萬葉十五・3686〕

○…聞こし食す 四方の国には 人さには 満ちてはあれど (美知弓波安礼杼) 鶏が鳴く 東男は 出で向かひ 顧みせず 勇みたる 猛き軍士と…

〔萬葉二十・4331 家持〕

○…人さには 満ちてはあれども (満弓播阿礼等母) 高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひて 勅旨 戴き持ちて 唐の遠き境に 遣はされ 罷りいませ…

〔萬葉 五・894 憶良〕

これも、いまだテとアリとの結びつきが弱く、アリが実質的な意味をもつことに拠る。

テアラ

テアラと訓み得るもの3例のうち

・上接語 動詞 2例

助動詞 1例(ヌ1)

・助詞が続くもの 2例(バ2)

助動詞が続くもの 1例(ス1)

○天照らす 神の御代より 安の川 中に隔てて 向かひ立ち

袖振りかはし 息の緒に 嘆かす兒ら 渡り守 舟も設けず  
橋だにも 渡してあらば(和多之豆安良波) その上ゆも  
い行き渡らし…

〔萬葉十八・4125 家持〕

○わが背子が やどの山吹 咲きてあらば(佐吉豆安良婆)  
止まず通はむ いや年のはに

〔萬葉二十・4303 家持〕

○梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりにて  
あらずや(奈利尔豆阿良受也)

〔萬葉 五・829 梅花歌卅二首〕

これらのアリは、十八・4125「橋」が「渡して」、  
二十・4303「山吹」が「咲きて」、五・829  
「桜花」が「咲くべくなりぬ」という状態において存  
在することを言う。

○天照らす 神の御代より 安の川 中に隔てて 向かひ立ち  
袖振りかはし 息の緒に 嘆かす兒ら 渡り守 舟も設けず  
橋だにも 渡してあらば(和多之豆安良波) その上ゆも  
い行き渡らし…

〔萬葉十八・4125〕

という長歌に

○天の川 橋渡せらば(波志和多世良波) その上ゆも い渡

らさむを 秋にあらずとも

〔萬葉十八・4126〕

など、二首の反歌が付いている。この部分は両首ほぼ同じ  
ことがらを述べているのであるが、4125歌では「橋だ  
にも 渡してあらば」となっている部分が、4126歌で  
は「橋渡せらば」となっている。「橋渡せらば」は「橋が  
渡したあつたならば」で、現存をあらわす。したがって、  
長歌の4125歌の「橋だにも 渡してあらば」のアリは  
存続ではない。存在をいうものである。テアリもあり存在  
の意味があるのである。すなわち、「橋だにも 渡してあ  
らば」は「橋だけでも渡したあつたならば」と訳するのが最  
適である。

## テアル

テアルと訓み得るもの3例のうち

・上接語 動詞

1例

助動詞

2例(ヌ1、ヌ1)

巻第十八・4125は家持の歌であるが、

・名詞にかかるもの

1例

句（SV）を承け、名詞を修飾するもの

1

助動詞が続くもの

2例（ラム2）

助動詞

1例（ヌ1）

・助詞が続くもの

3例（バ3）

原因・理由をあらわすもの

2例

○：老いにてある（老尔弓阿留） 我が身の上に 病をと 加

へてあれば 昼はも 歎かひ暮らし 夜はも 息づき明かし

年長く 病みし渡れば：

〔萬葉 五・897 目録に憶良とある〕

○：しましくも ひとりありうる ものにあれや 島のむろの木  
離れてあるらむ（波奈礼弓安流良武）

〔萬葉十五・3601 天平八年〕

○：遠くあれば 一日一夜も 思はずて あるらむものと（於母

波受弓 安流良牟母能等） 思ほしめすな

〔萬葉十五・3736 中臣朝臣宅守〕

これらのアリも、五・897「（歌の主）」が「老いに  
て」、十五・3601「むろの木」が「離れて」、十五・3  
736「（宅守）」が「思はずて」という状態において存在  
することを言う。

## テアレ

テアレと訓み得るもの5例のうち

・上接語 動詞

4例

○：老いにてある 我が身の上に 病をと 加へてあれば（加

弓阿礼婆） 昼はも 歎かひ暮らし 夜はも 息づき明かし

年長く 病みし渡れば：

〔萬葉 五・897 目録に憶良とある〕

○：天地の 神相うつなひ 皇祖の 御霊助けて 遠き代に  
かかりしことを 朕が御代に 顕はしてあれば（安良波之弓

安礼婆） 食す国は 榮えむものと 神ながら 思ほしめし  
て：

〔萬葉十八・4094 家持〕

○：玉梓の 道をた遠み 山川の 隔りてあれば（敵奈里弓安  
礼婆） 恋しけく 日長きものを 見まく欲り 思ふ間に：

〔萬葉十七・3957 家持〕

○：玉梓の 道はし遠く 関さへに 隔りてあれこそ（敵奈里  
弓安礼許曾） よしゑやし よしはあらむそ：

〔萬葉十七・3978 家持〕

○：まつがへり しひにてあれかも（之比尔弓安礼可母） さ山  
田の 翁がその日に 求めあはずけむ

〔萬葉十七・4014 家持〕

ここでも、アリは、五・897「（歌の主）」が「病を

と加へて、十八・4094「天地の神・皇祖の御霊」が「聖武天皇 朕が御代に顕はして」、十七・3957「弟と私と」が「玉梓の道をた遠み山川の隔りて」、十七・3978「妹と私と」が「玉梓の道はし遠く関さへに隔りて」、十七・4014「山田の翁」が「しひにて」という状態において存在することを言う。

以上、テアラ・テアル・テアレのアリには、そのものの存在の意味がある。

### テとアリとの間に助詞シ・モ・ハの入っているもの

○遠江 志留波の磯と 尔閑の浦と 合ひてしあらば（安比呂之阿良婆） 言も通はむ  
〔萬葉二十・4324 防人歌〕  
○旅なれば 思ひ絶えても ありつれど（於毛比多要弓毛 安里都礼杵） 家にある妹し 思ひ悲しも

〔萬葉十五・3686〕

○…聞こし食す 四方の国には 人さには 満ちてはあれど（美知弓波安礼杵） 鶏が鳴く 東男は 出で向かひ 顧みせず 勇みたる 猛き軍士と…

〔萬葉二十・4331 家持〕

○…人さには 満ちてはあれども（満弓播阿礼等母） 高光る

日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひて 勅旨 戴き持ちて 唐の遠き境に 遣はされ 罷りいませ…

〔萬葉 五・894 憶良〕

テアリは後に、熟合してタリとなり、存続や状態をあらわすことばになるのであるが、右のように、テとアリとの間にシ・モ・ハのような助詞が入ることができる。テとアリとは結びつきが弱く、アリには、いまだ存在の意味が残っているのである。

### ニテアリ

○梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりにてあらずや（奈利尔弓阿良受也）

〔萬葉 五・829 梅花歌卅二首〕

は梅花歌三十二首のうちの一首であるが、同じ梅花歌三十二首の中に

○梅の花 咲きたる園の 青柳は 縵にすべく なりにけらずや（奈利尔家良受夜）

〔萬葉 五・817 梅花歌卅二首〕

「なりにけらずや」がある。

○…老いにてある（老尔弓阿留） 我が身の上に 病をと 加へてあれば（加弓阿礼婆） 昼はも 歎かひ暮らし 夜はも

息づき明かし 年長く 病みし渡れば：

〔萬葉 五・ 897 目録に憶良とある〕

は、同じ歌の中に、「老いにてある」と「加へてあれば」がある。

○まつがへり しひにてあれかも（之比尔豆安礼可母） き山

田の 翁がその日に 求めあはずけむ

〔萬葉十七・ 4014 家持〕

は、巻第九・ 1783

○松反り しひてあれやは（四臂而有八羽） 三栗の 中上り

来ぬ 麻呂といふ奴

〔萬葉 九・ 1783 柿本朝臣人麻呂之歌中出〕

をもとにしたものであろう。こちらは「しひてあれやは」である。

ここに並べた「なりにけらずや」「加へてあれば」「しひてあれやは」などは、訳すと、

◎ 817 「縵にすることができるところになつてしまつたではないか」

◎ 897 「病が加わつてゐるので」

◎ 1783 「ぼけてゐるのではないか」

これに対して、今の三首はニテアリの形である。訳すと、

◎ 829 「桜が咲きそうになつてしまつてゐるではないか」

◎ 897 「老いてしまつてゐる」

◎ 4014 「耄碌してしまつてゐるからであるうか」  
のように、ニテアリは、「そういう状態になつてしまつて、存在する」の意である。

以上、萬葉集のテアリは、

あるできごとが起こり、そのありかたにおいて、そのものが存在することをいう

#### 四・ 2 タリ

萬葉集のタリ（一字一音）は

未然形	タラ	2例
連用形	タリ	3例
終止形	タリ	6例
連体形	タル	25例
已然形	タレ	1例
命令形	タレ	0例

#### 未然形 タラ

未然形タラと訓み得るもの2例のうち

・ 上接語 動詞 2例

・ 助詞が続くもの 1例（六一）

助動詞が続くもの

1例(ス1)

○玉に貫く 棟を家に 植ゑたらば(宇恵多良婆) 山ほととぎす 離れず来むかも [萬葉十七・3910 大伴書持]

は、兄家持の

○わが背子が やどの山吹 咲きてあらば(佐吉互安良婆) 止まず通はむ いや年のはに [萬葉二十・4303 家持] とよく似ている。が、4303歌は、

◎あなたの庭の山吹の花が咲いてあるならば、止むことなく通いましょう、毎年。

で、アリは花が咲いて存在していることをあらわし、3910歌は、

◎玉に通す棟を家に植えてあつたならば、山ほととぎすが毎日やってくるだろうか。

で、タリは状態を言う。テアリには、いまだ、そのものやその状態の存在が目に見えている。が、タリの中のアリは形式的に、持続をあらわすものとなっている。

○常人の 恋ふといふよりは 余りにて われは死ぬべく なりにたらずや(奈里尔多良受也)

[萬葉十八・4080 大伴氏坂上郎女]  
このタリは、テアリに挙げた梅花歌三十二首のうちの

○梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりにて

あらずや(奈利尔互阿良受也)

[萬葉 五・829 梅花歌卅二首]

のテアリと似ている。しかし、829歌「なりにてあらずや」の「あり」は花が咲きそうになっている桜の「在り様」をあらわし、4080歌「なりにたらずや」の「たり」は死にそうな「状態」をあらわしている。

## 連用形 タリ

連用形タリと訓み得るもの3例のうち

・上接語 動詞

3例

・助動詞が続くもの

3例(ケリ3)

○この里は 継ぎて霜や置く 夏の野に 吾が見し草は もみちたりけり(毛美知多里家利) [萬葉 十九・4268]  
「もみちたりけり」は「色がかわっているよ」で、「たり」は「状態」。

## 終止形 タリ

終止形タリと訓み得るもの6例のうち

・上接語 動詞

6例

・終止するもの

5例

助動詞が続くもの

1例(トモ1)

○卯の花の 咲く月立ちぬ ほととぎす 来鳴きとよめよ 含  
みたりとも (敷布美多里登母)

「含みたりとも」は「つぼんでいようと」で、「たり」は「ている」へ状態へ。  
〔萬葉十八・4066 家持〕

○針袋 取り上げ前に置き 返さへば おのともおのや 裏も  
継ぎたり (宇良毛都芸多利) 〔萬葉十八・4129〕  
「裏も継ぎたり」は「裏まで付けてある」で、「たり」  
は「である」へ状態へ。

## 連体形 タル

連体形タルと訓み得るもの25例のうち

・上接語 動詞 25例

・助動詞が続くもの 2例 (ラム2)

・疑問副詞ソの結びのもの 1例

・名詞にかかるもの 20例

動詞を承け、名詞を修飾するもの (逆述語) 11

句 (SV) を承け、名詞を修飾するもの 9

ゴトシが続くもの 1例

準体言を形成するもの 1例

○をみなへし 咲きたる野辺を (左伎多流野辺乎) 行き巡り

君を思ひ出 たもとほり来ぬ

〔萬葉十七・3944 掾大伴宿祢池主〕  
の「たる (タリ)」の場合は、テアリの「咲いてある」  
の意の延長にあつて、存続をあらわす。

○古よ 今の現に 万調 奉るつかさと 作りたる (都久里  
多流) その生業を…

〔萬葉十八・4122 守大伴宿祢家持〕  
の「たる (タリ)」は、存続である。この例は、「…作  
りたる」という句 (SV) を承けて、「生業」にかか  
るものであるが、その間に、「その」という語が入っ  
ている。この「その」は、前の句を承けることを明確  
に述べるものであつて、現代の英文和訳の際に、「…  
であるところの」と訳すものに近い。萬葉集では、  
連体形を承ける際に、このような構文を用いることが  
ある。

○梅の花 夢に語らく みやびたる (美也備多流) 花とあれ  
思ふ 酒に浮かべこそ

〔萬葉 五・852 後追和梅花四首〕  
○…天皇の 食す国なれば 命もち 立ち別れなば 後れたる  
(於久礼多流) 君はあれども…

〔萬葉十七・4006 家持〕

○…大君の 命恐み 食す国の 事取り持ちて 若草の 足結  
たづくり 群鳥の 朝立ち去なば 後れたる（於久礼多流）  
我や悲しき 旅に行く 君かも恋ひむ…

〔萬葉十七・4008 大伴宿祢池主〕

などの場合は、「みやぶ」「おくる」などが、動作性の動詞ではなく、状態性の動詞である。そのため、「みやびたる」「後れたる」の「たる（タリ）」は、完全に、〈状態〉をあらわす語となっている。

○…我妹子が 形見がてらと 紅の 八入に染めて おこせたる（於己勢多流） 衣の裾も 通りに濡れぬ

〔萬葉十九・4156 家持〕

の「おこせたる」の場合には、

○人の国よりおこせたる文の物なき。

〔枕草子 すさまじきもの（全集『枕草子』五八頁）〕

など、平安朝に多くみられる意の「贈つてくれた、そして今日の前にある」のタリに近づいている。

○我妹子が 下にも着よと 贈りたる（於久理多流） 衣の紐を あれ解かめやも

〔萬葉十五・3585〕

「贈りたる」の場合も右に同じ。

已然形タレと訓み得るもの1例

・上接語 動詞

1例

・原因・理由をあらわすもの

1例

○雪こそは 春日消ゆらめ 心さへ 消え失せたれや（消失多列夜） 言も通はぬ

〔萬葉 九・1782 柿本朝臣人麻呂之歌中出〕

「消え失せたれや」は「消え失せてしまっているからなのか」で、「たれ（タリ）」は〈状態〉をあらわす。

以上、萬葉集のタリは、

存続・状態をあらわす

また、

「文やものを贈ってきた、そしてそれが今日の前にある」の意をあらわす

## 五 萬葉集のキ

萬葉集のキ（一字一音）は

未然形 セ 24例

終止形 キ 29例

連体形 シ 507例



已然形 シカ

2 1例<sup>(6)</sup>

## 未然形 セ

未然形セと訓み得るもの24例のうち

・上接語 動詞

14例

形容詞

3例 (ナカリ3)

形容詞に準ずるもの

1例 (近クアリ1)

助動詞

5例 (ザリ2、リ2、ニアリ1)

その他

1例 (ナリハニ在リ)

・セは、すべてバに接する。

句末にムを有するもの

2例

マシを有するもの

22例

句末にムを有するものは六・948歌と十二・3214歌。

○…かく継ぎて 常にありせば (常丹有脊者) 友並めて 遊ばむものを 馬並めて 行かまし里を 待ちかてに わがせし春を…

〔萬葉 六・948〕

◎…こんなふうにならずと普段通りであつたなら、仲間と一緒に遊ぶものを、馬を並べて行こうという里なのに、私が待ちかねていた春なのに、…

「常にありせば」は「普段通りであつたなら」で、「せ(キ)」は事実反する仮定。

○…吾が大君 皇子の尊の 天の下 知らしめしせば (所知食世者) 春花の 貴からむと (貴在等) 望月の たたはしけむと 天の下 一に云ふ、「食す国の」 四方の人の 大船の 思ひ頼みて 天つ水 仰ぎて待つに…

〔萬葉 二・167 柿本朝臣人麻呂〕

◎…わが大君、日並皇子尊が天下をお治めになるならば、その世の中は、春の花のように栄え、望月のように満ち足りたものになるであろうと、天下の人々が頼りに思つて、仰ぎ見て、その日を待っていたのに…

全集の注に、

◇知らしめしせば―セバは反事実の仮定。「天の下四方の人」の思惟内容であるから知ラシメシナバなどあるべきところだが、皇子薨後の結果論なので反事実的表現となった。

と言う。「知らしめしせば」は「お治めになるならば」と訳すが、日並皇子尊薨去の後であるため、反実仮想の形をとる。

※釋注は、「所知食世者」を「知らしめす世は」と訓む。これも一案である。が、今は、通訓のように「シラシメシセバ」と訓んでおく。

セバームは、いずれも反事実の仮定に用いられている。句末にマシを有するもの

○堀江より 朝潮満ちに 寄ることみ 貝にありせば (可比尔

安里世波) つとにせましを〔萬葉二十・4396 家持〕

「貝にありせば」は「これが貝であつたならば」。「せ(き)」は反実仮想。

○かからむと かねて知りせば(豫知勢婆) 大御船 泊てし

泊りに 標結はましを 〔萬葉 二・151 額田王〕

「かねて知りせば」は「あらかじめ知っていたならば」。「せ(き)」は以前のできごとの反実仮想。

以上、未然形には、現在の反実仮想・以前のできごとの反実仮想の用法がある。

セが現在の反実仮想のもの

14例

セが以前のできごとの反実仮想のもの

10例

## 終止形 キ

終止形キと訓み得るもの29例のうち

・上接語 動詞

15例

助動詞

14例(二5、テ4、ザリ1、ズ4)

・終止するもの

24例

助詞が続くもの

5例(ヤ5)

## 終止

○香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき(相諍競伎)

神代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ うつせみ

も 妻を争ふらしき 〔萬葉 一・13 中大兄皇子〕

「相争ひき」、香具山が耳梨と争つたという「古」のできごとを「き」であらわしている。

疑問のヤが接するもの

○夜昼と いふわき知らず 吾が恋ふる 心はけだし 夢に見

えきや(夢所見寸八) 〔萬葉 四・716〕

「夢に見えきや」は「夢にあらわれたでしょうか」。

「き」は以前のできごと。

## ニキ

○留めえぬ 命にしあれば しきたへの 家ゆは出でて 雲隠

りにき(雲隠去寸) 〔萬葉 三・461 大伴坂上郎女〕

これは、理願の死去を悲嘆して作つた歌。「に(ヌ)」

は「雲隠る」ことが成りおわっていることをあらわす。

すでに死去しているので、「き」は古いできごと。

## テキ

○思ひにし 余りにしかば すべをなみ 吾は言ひてき(吾者

五十日手寸) 忌むべきものを 〔萬葉十二・2947〕

「て(ツ)」は、「言う」というとりかえしのつかない

ことをしてしまったことを言い、「き」は、それが以

前のできごとであることをあらわす。

終止形のものうちに、打消しのズに接するものが6例あ

る。ただし、ズの一音一字の例は、巻第五・854のみ。

○玉島の この川上に 家はあれど 君をやさしみ 表さずありき〔阿良波佐阿利吉〕 〔萬葉 五・854〕

○人言を 繁み言痛み 逢はざりき (不相有寸) 心あること な思ひわが背子 〔萬葉 四・538〕

○現にも 夢にも 吾は 思はずき (不思寸) 古りたる君に ここに逢はむとは 〔萬葉十一・2601〕

新大系では、「ずありき」2例、「ざりき」と訓んでいるもの1例、「ずき」と訓んでいるもの3例。(全集は新大系と同じ訓。集成では巻第四・538を「逢はずありき」と訓んでいる。)キは古いできごと。

## 連体形 シ

連体形シと訓み得るもの507例のうち

・上接語 動詞 504例

形容詞 2例

形容動詞 1例

・助詞が続くもの 19例 (カモ1、ヲ16、ニ2)

係助詞の結びのもの 27例 (ソ22、カ2、カモ1、ヤ2)

名詞にかかるもの 379例

形容動詞を承け、名詞を修飾するもの (逆述語) 1

形容詞を承け、名詞を修飾するもの (逆述語) 2

動詞を承け、名詞を修飾するもの (逆述語) 96

動詞を承け、目的語を修飾するもの 96

句 (SV) を承け、名詞を修飾するもの 184

体言が続くもの 57例 (コト6、トキ16、モノ2、モノヲ

16、モノカモ1、カラニ4、ユエ

ニ2、アイダ3、マニマ1、ナヘ4、

ゴトク1、モコロ1)

準体言を形成するもの 19例

連体形で終止するもの 6例

シはいずれも、以前のできごとをあらわす。

準体言のうち、

○…大鳥の 羽易の山に 吾が恋ふる 妹はいますと 人の言

へば 岩根さくみて なづみ来し (名積来之) 良けくもそ

なき うつせみと 思ひし妹が 玉かざる ほのかにだにも

見えなく思へば 〔萬葉 二・210〕

の「なづみ来し 良けくもそなき」は「なづみ来し」が準体言となり、「苦労してやって来た、それは、いいこともなかった」である。

連体形で終止するものは、

○吾が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 曉露に 吾が立ち

濡れし (吾立所需之) 〔萬葉 二・105〕

のように、連体形で終止して、詠嘆をあらわすものである。これは、古事記および風土記の、

○葦原の 穢しき小屋に 菅畳 弥清敷きて わが二人寝し

(和賀布多理泥斯) 『古事記 19 歌謡 全集』『古事記』

○潮には 立たむと言へど 奈西の子が 八十島隠り わを見  
さば知りし (和乎弥佐婆志理之)

〔常陸国風土記 全集『風土記』 398頁—399頁〕

にもあつた形である。

ここで、シのあとに指示語(コノ・ソノ)が続く例について考える。

○宜しなへ わが背の君が 負ひ来にし (負来尔之) この勢  
能山を (此勢能山乎) 妹とは呼ばじ

〔萬葉 三・286〕

○行くさには 二人吾が見し (二吾見之) この崎を (此崎  
乎) ひとり過ぐれば 心悲しも

〔萬葉 三・450 旅人〕

○…この九月を 吾が背子が 偲ひにせよと 千代にも 偲ひ  
わたれと 万代に 語り継がへと 始めてし (始而之) こ  
の九月の (此九月之) 過ぎまくを いたもすべなみ…

〔萬葉十三・3329〕

などの例は、「シ」がかかつていくことばのはじめに

「此」があつて、「コノ」と訓まれている。今日の前の、「勢能山」「崎」「九月」を指して「コノ」と言うものである。

○剣大刀 いよよ研ぐべし 古ゆ さやくく負ひて 来にしそ  
の名そ (伎尔之曾乃名曾) 〔萬葉二十・4467 家持〕

これは、家持の「喻族歌」の反歌で、「その名」は、長歌にある「大伴の 氏と名に負へる ますらをの伴」の、「大伴の名」を指す。

○…大君の 命恐み あしひきの 山越え野行き 天離る 鄙  
治めにと 別れ来し (別来之) その日の極み (曾乃日乃伎  
波美) あらたまの 年行き反り 春花の うつろふまでに  
相見ねば いたもすべなみ…

〔萬葉十七・3978 家持〕

は、「…大君のご命令が恐れ多くて、山を越え野を行き、鄙を治めるために、妻と別れてきたその日を境として…」。  
「大君の別れ来し」を承けて「ソノ」と言う。

○おしる 難波の菅の ねもころに 君が聞こして 年深く  
長くし言へば まそ鏡 磨ぎし心を 緩してし (縦手師)  
その日の極み (其日之極) …

〔萬葉 四・619 大伴坂上郎女〕

○吾が背子を 相見しその日 (相見之其日) 今日までに 吾  
が衣手は 乾る時もなし 〔萬葉 四・703〕

の二首の「ゝシ」がかかることばは「其日」で、「その日」と訓むことができる。619歌は「難波の菅の、ねんごろにあなたが声をかけ、年久しく長くおっしゃるので、まそ鏡を研ぐように研ぎ澄ました心をわたくしがゆるした、その日を境として…」。「おしてるゝ緩してし」を承けて「ソノ」と言う。703歌は「あなたとお逢いしたその日、それから今日まで…」。「吾が背子を 相見し」を承けて「ソノ」と言う。「ソノ」は、「まさに、その日」と、特定の日を限定する語である。

○二上の 峰の上の繁に 隠りにし（許毛里尔之） そのほととぎす（彼霍公鳥） 待てど来鳴かず

〔萬葉十九・4239 家持〕

○あらたまの 年の緒長く 相見てし（相見氏之） その心引き（彼心引） 忘らえめやも〔萬葉二十・4248 家持〕  
の二首は、「ゝシ」がかかつていくことばのはじめに「彼」があつて、「ソノ」と訓むことができる。4239歌「去年の夏に、二上の峰の繁みに身を隠した、あのホトトギス」、4248歌「年久しく見てきた、あなたのそのあたかいお心」で、「ソノ」は、「彼」の字が用いられているように、遠称をあらわす。

○一本の なでしこ植ゑし（奈泥之故宇恵之） その心（曾能許己呂） 誰に見せむと 思ひそめけむ

〔萬葉十八・4070 家持〕  
は、「一本のなでしこを植えたその心は、いつたい誰に見せようと思つてのことだったか」。「一本の なでしこ植えし」を承けて「その」と言う。現代の英文和訳で、「…であるところの」と訳すものにも通じる語法である。これは、タリの連体形タルの項にも述べた。連体形がへ句（SV）を承け、名詞を修飾する場合、連体形自体に、そのような機能は備わっている。そこに「ソノ」が挿入されるとき、「ソノ」は前項の句を強調するはたらきを持つ。今の4070歌の「その心」の「その」は、右に挙げた「その日」よりもさらに、特定する感が強い。

## 已然形 シカ

已然形シカと訓み得るもの21例のうち

・上接語	助詞	19例
・助詞が続くもの	助動詞	2例（二二）
係助詞の結び		15例（六一、ド三、ドモ一） 6例（コソ六）

○昔こそ 外にも見しか（外尔毛見之加） 我妹子が 奥つ城と今 愛しき佐保山 〔萬葉 三・474〕

◎昔は自分とは関わりのないものと見ていたけれど、今は妻の

墓所として、愛しく思える佐保山だよ。

○昨日こそ 船出はせしか（敷奈但婆勢之可） いさなとり  
比治奇の灘を 今日見つるかも 「萬葉十七・3893」  
◎昨日船出したばかりだというのに、もう今日は比治奇の灘を  
見たことだ。

いずれも昔と今、昨日と今日の対比で、「ししか（キ）」は以前のできごと。已然形は、バ・ド・ドモが続かない形で、「し」であれば「し」であるけれど」の意をあらわす。「こそ」は、その強め。

○川上の 根白高萱 あやにあやに さ寝さ寝てこそ 言に出  
にしか（己登尔弓尔思可） 「萬葉十四・3497」  
◎川上の根白の高萱、むやみに共寝を繰り返したから、人の噂  
に上ってしまったのだ。

の場合は、「コソ」已然形」で強調表現となっている。<sup>(9)</sup>

## ヌ ニキ ニケリ

○うぐひすの 声は過ぎぬと（許惠波須疑奴等） 思へども  
染みにし心（之美尔之許己呂） なほ恋ひにけり（奈保古非  
尔家里） 「萬葉二十・4445 家持」

「過ぎぬ」の「ぬ」は到来。「染みにし」の「にし」は  
「染む」ことの達成した（に）のが以前のできごとである  
（「し」）ことを言う。「にけり」は「恋ふ」ということ

が到来（「に」）した（「けり」）。ケリは確認。

◇「うぐいす」に言寄せて、今城への思慕が不変であることを  
述べた歌。（集成）

## キとツ

○鏡なす 吾が見し君を（吾見之君乎） 阿婆の野の 花橘の  
珠に拾ひつ（珠尔拾都） 「萬葉 七・1404」

生前愛した人を、花橘の実のように拾った。「し」は以前  
のできごと。「つ」はその行為を確かに行なったというこ  
とをあらわす。

以上、萬葉集のキは、

古いできごと、以前のできごとを言う

未然形のセは、現在の反実仮想・過去の反実仮想をあ  
らわす

## 六 萬葉集のケリ

萬葉集のケリ（一字一音）は

未然形 ケラ 3例

終止形 ケリ 107例

ほかに、東国語カリ1例

連体形 ケル 107例

ほかに、ケラシ（ケルラシ） 28例

ケラシキ（ケルラシキ） 1例

已然形 ケレ 20例

ク語法 ケラク 1例

## 未然形 ケラ

未然形ケラと訓み得るもの3例のうち

・上接語 助動詞 3例（ヌ2、ユ1）

助動詞に続くもの 3例（ズ3）

未然形はすべてケラズヤの形。

○この花の 一よのうちは 百種の 言持ちかねて 折らえけ

らずや（所折家良受也） 〔萬葉 八・1457〕

は、藤原朝臣広嗣が桜の花を娘子に贈ったときの歌の

○この花の 一よのうちに 百種の 言を隠れる おほろかに

すな 〔萬葉 五・1456〕

に対して、娘子が和した歌である。「折られたのではなかったかしら」。この時、既に、花は折られている。したがって、以前のできごとである。ケリは以前のできごとの確かめ。

○梅の花 咲きたる園の 青柳は 縵にすべく なりにけらず

や（奈利尔家良受夜）

〔萬葉 五・817 梅花歌卅二首〕

は、梅花歌三十二首のうちの一首である。「咲きたる」は「咲いている」で、「たる（タリ）」は存続。「縵にすべくなりにけらずや」は「縵にすることができそうなほどに枝が伸びたではないか」で、青柳の新芽が出て枝が伸びているさまを言う。「に（ヌ）」は達成、「けら（ケリ）」は以前のできごとの確かめ。「ケラズヤ」のまとまりで「くだったのではないか」という確認の意味をもつ。

## 終止形 ケリ

終止形ケリと訓み得るもの107例のうち

・上接語 動詞 8例

形容詞 9例（ナカリ1、悪シカリ1、ナクアリ1、

悲シカリ1、苦シカリ2、サヤケカ

リ1、短カリ1、長ク（ハ）アリ1）

形容動詞 1例（盛リナリ1）

助動詞 89例（ナリ1、ニアリ5、ヌ75、タリ2、

ズ6）

・終止するもの 107例

○みやびをに 吾はありけり(吾者有家里) やど貸さず 帰

しし吾そ みやびをにはある [萬葉 二・ 127]

後の「みやびをにはある」は現在。前の「みやびをにわれはありけり」も現在で、「まさしく、風流人だったのだよ」。ケリは確認<sup>10)</sup>。

○我妹子は 常世の国に 住みけらし(住家良思) 昔見しよりをちましにけり(麥若益尔家利)

[萬葉 四・ 650]

「住みけらし」は「住んでいたのだったらしい」。ケラシは確実だと思ふ推定。「昔見し」は「昔見た」で、「し(キ)」は遠い日。「をちましにけり」は「若さが増したことだ」。「に(ヌ)」は達成、「けり」はその結果を確認している。

○常盤なす 岩屋は今も ありけれど(安里家礼騰) 住みける人そ(住家類人曾) 常なかりける(常無里家留)

[萬葉 三・ 308 博通法師]

この歌は、博通法師が、紀伊国で、三穂の石室を見て作った歌である。ともに作られた歌は、

○はだすすき 久米の若子がいましける 一に云ふ、「けむ」三穂の岩屋は 見れど飽かぬかも 一に云ふ、「荒れにけるかも」

[萬葉 三・ 307]

○岩屋戸に 立てる松の木 汝を見れば 昔の人を 相見るご

とし [萬葉 三・ 309]

で、これらの歌から、「住みける人」は、久米の若子で、過去の人であることがわかる。よって、「住みける人」の「ける(ケリ)」は昔のできごとで、この場合のケリは過去のできごとの確認をあらわす。

岩屋は今も変わらず在る。それに対して、住んでいた人は常住ではない。「岩屋は今もありけれど」「常なかりける」のケリはいずれも確認。

終止形ケリの特徴として、ニケリの形が多いこと(107例中、75例)があげられる。右の四・650にもあつたように、ヌは達成、ケリは確認をあらわす。

## 連体形 ケル

連体形ケルと訓み得るもの107例のうち

・上接語 動詞 37例

形容詞 3例

形容動詞 1例

助動詞 66例(ヌ52、アリ7、ズ2、ズアリ1、

リ3、ツ1)

・助詞が続くもの 26例(カ3、カモ22、ヲ1)

疑問副詞の結び 1例(ナニシカ1)

係助詞の結び 53例(ソ45、ソモ2、カ1、カモ2、ヤ3)



名詞にかかるもの

14例

動詞を承け、名詞を修飾するもの（逆述語）

8

句（SV）を承け、名詞を修飾するもの

6

コトに続くもの

3例

トキに続くもの

1例

モノヲに続くもの

5例

準体言

2例

体言止め

2例

連体形ケルにおいても、ニケルの形が多い（107例中、52例）。また、カモが続くもの22例、係助詞ソの結びが45例ある。

○秋さらば 見つつしのへと 妹が植ゑし やどのなでしこ

咲きにけるかも（開家流香聞）

〔萬葉 三・ 464 家持〕

「に（ヌ）」は「咲く」という動作の達成。「ける（ケリ）」は確認。「かも」は詠嘆。記紀風土記にも、詠嘆のケリはなかった（拙稿「記紀風土記のツ・ヌ・リ・タリ・キ・ケリ」『京都語文21号』所収）が、萬葉集においても、ケリがカモとともに詠まれており、萬葉集のケリに詠嘆の意がないことが確認できる。係助詞「そ」の結びの「ける」

○朝髪の 思ひ乱れて かくばかり なねが恋ふれそ 夢に見えける（名姉之恋曾 夢尔所見家留）

〔萬葉 四・ 724 大伴坂上郎女〕

◎〈朝髪の〉思ひ乱れて、こんなにもお姉ちゃんがわたくしを恋しがっているから、あなたはわたくしの夢に出てくるのですね。

も確認をあらわす。

## 已然形 ケレ

已然形ケレと訓み得るもの20例のうち

・上接語 動詞

8例

形容詞

2例

助動詞

7例（ヌ4、ズ2、タリ1）

ニアリ

1例

テアリ

2例

・助詞に続くもの

6例（バ5、ド1）

原因・理由をあらわすもの

2例

係助詞の結びのもの

12例（コソ12）

已然形ケレでは、係助詞コソの結びのものが多く（20例中、12例）。

○家島は 名にこそありけれ（奈尔許曾安里家礼） 海原を

あが恋ひ来つる 妹もあらなくに〔萬葉十五・3718〕

◎家島とは単に島の名だったけれど、わたくしは妻に恋い焦が

れて海原をやってきたのだった。そこに妻もいないのに。

については、ツの項でも述べた(朗頁)。「家島は 名にこそありけれ」の「コソく已然形」は、逆接をコソで強調する、「コソく已然形」本来の用法の一つ。

○わが背子がかく恋ふれこそ ぬばたまの 夢に見えつつ  
寝ねえすけれ(寐不所宿家礼) 〔萬葉 四・639〕

「かく恋ふれこそ」は、「かく恋ふればこそ」に同じ。この歌の場合には、「コソく已然形」は、夢に出てきて夜も眠れないことの原因の強調をあらわす。

○葦垣の外にも君が 寄り立たし 恋ひけれこそば 夢に見えけれ(孤悲家礼許曾婆 伊米尔見要家礼)

〔萬葉十七・3977 家持〕

○葦垣の外にまで立ち寄って、あなたがわたしを恋い偲んだのだったからこそ、夢に現れたのだったのですね。

「恋ひけれこそば」の「恋ひけれ」は「恋ひければ」に同じ。「こそば」は係助詞「こそ」と係助詞「は」。コソとハとが並んで用いられているところに、コソの用法がはつきりあらわれる。コソは、主文「夢に見えけれ」の原因である「葦垣の外にも君が 寄り立たし 恋ひけれ」を強調する。ハは文(歌)全体を強調する語である。

この歌は、大伴池主が三月五日に届けた短歌

○わが背子に 恋ひすべなかり 葦垣の外に嘆かふ あれし

悲しも

〔萬葉十七・3975〕

に、同じく三月五日、大伴家持が返した歌である。たとえば、釋注の訳は、

◎「あなたに恋い焦がれてどうにもしようがないので、葦の垣根の外側に立って嘆くばかりの私、何とも悲しくてなりません。(三九七五)

○葦の垣根の外にあなたが寄り立たれながら、私に心を寄せていて下さったからこそ、お姿が夢に見えたのですね。(三九七七)

で、3975歌を現在形、3977歌を過去形で訳している。他の注釈書も同じ。しかし、池主が嘆いているのは恒常的なことである。3977歌を過去形で訳すと、池主の嘆きが過去のことになってしまふ。「いつもいつも、これから」という意味で、この場合のケリには、過去のできごとという限定を付さないほうがよい。池主からの歌も家持からの返歌も、同じ日に詠まれたものでもあるのである。このケリは、へ気づきへくだったのだ<sup>⑫</sup>」である。

以上、萬葉集のケリは、

以前のできごとの確認  
現在のできごとの確認

「くだったのだ」という気づき

ケラシは確実だと思ふ推定である  
また、

萬葉集のケリに詠嘆の意味はない

## キとケリ

ケリは、以前のできごとをあらわすものとして、キと較べられることばである。そこで、ケリとキとが一緒に用いられている歌を検討する。

○恋しけば 形見にせむと 吾がやどに 植ゑし藤波（殖之藤浪） 今咲きにけり（今開尔家里）

〔萬葉 八・1471 山部宿祢赤人〕

○恋しいので形見にしようとなつたの庭に植えた藤が今咲いた。庭に藤を植えたのは以前のことである（「し」）。その藤が今咲いた。咲くということが達成され（「に」、それを確認している（「けり」）。

○今日降りし（今日零之） 雪に競ひて 我がやどの 冬木の梅は 花咲きにけり（花開二家里）

〔萬葉 八・1649 家持〕

○今日降つた雪と競争して、私の庭の冬木の梅が花を開いた。雪が降つたのは今日のことであるが、今日の早い時間で、今は降っていない（「し」）。その雪の白さに競うように白い梅が咲いた。咲くということが達成され

（「に」、それを確認している（「けり」）。  
ところで、

○手もすまに 植ゑしも著く（殖之毛知久 出で見ればやどの初萩 咲きにけるかも（咲尔家類香聞）

〔萬葉 十・2113〕

○手も休めずに植えた甲斐があつて、外に出てみると、庭の萩が咲くようになっていたことだ。

以前、秋萩を「植えた」（「し」）。その花が咲くということが達成され（「に」、それを確認している（「けり」）。

2113 歌では、ケルのあとにカモが続いている（一字一音ではないが、萬葉集中、ケルカモと訓み得る例は50例存在し、そのうち49例がニケルカモの形である）。カモが詠嘆であるから、この時代のケリに詠嘆の意味はないことが明らかである。

以上のように、

キは、以前のできごとであることを言う。

ケリは、行為やできごとが起こり、それを確認することばである。さらに、現在のことについても確認する用法がある。

## まとめ

萬葉集においては、

ツは

行為の遂行をあらわす

ある行為が行われたこと、あるできごとが起こったことを強く確認する

ある行為が行われたことをきっぱり言う

取り返しがつかないという気持をあらわす

で、行為の遂行やできごとが起こってしまったことに對する、強い気持を含むものが多い。

また、

可能をあらわすベシとともに用いられたツは、そのできごとがおこってしまったことや行為の遂行を確認するものである

又は

動作やできごとの到達・達成・到来と、その確認である

また、

可能をあらわすベシとともに用いられた又は、そのできごとの達成を確認するものである

リは

現存・存続・判断・確述をあらわす  
また、

状態性語尾ともなり、

「了した、その結果、今ある」の意をあらわすものもある

ある

テアリは

あるできごとが起こり、そのありかたにおいて、そのものが存在することという

タリは

存続・状態をあらわす

また、

「文やものを贈ってきた、そしてそれが今日の前にある」の意をあらわす

キは

古いできごと、以前のできごとを言う

未然形のセは、現在の反実仮想・過去の反実仮想をあらわす

ケリは

行為やできごとが起こり、それを確認することばである

さらに、現在のことがらについても確認する用法が生じている

それは、「くだったのだ」という気づきにつながる  
また、

ケラシは確実だと思ふ推定である  
なお、

この時代のケリに詠嘆の意味はない

## 注

(1) この用法は、現代語でも、「金メダルこそ取れなかったけれど、よくがんばった。」のような表現の中に残っている。

(2) 「そゝ連体形」のものの中に、

○里人の 吾に告ぐらく(吾丹告衆) 汝が恋ふる 愛し  
夫は もみち葉の 散りまがひたる 神奈備の この山  
辺から 或る本に云く、「その山辺」 ぬばたまの 黒馬に乘  
りて 川の瀬を 七瀬渡りて うらぶれて 夫は逢ひき  
と 人そ告げつる(人曾告鶴)

〔萬葉十三・3303〕

○：娘子らが 夢に告ぐらく(伊米尔都具良久) 汝が恋  
ふる その秀つ鷹は 松田江の 浜行き暮らし つなし  
捕る 水見の江過ぎて 多祐の島 飛びたもとほり 葦  
鴨の すだく旧江に 一昨日も 昨日もありつ 近くあ  
らば いま二日だみ 遠くあらば 七日のをちは 過ぎ  
めやも 来なむわが背子 ねもころに な恋ひそよとそ  
いまに告げつる(奈孤悲曾余等 伊麻尔都気都流)

〔萬葉十七・4011〕 家持

がある。十三・3303「告ぐらく…人そ告げつる」は雑歌  
に入っており作者不明。十七・4011「告ぐらく…とそ今

に告げつる」は家持の歌である。「告ぐらく」は萬葉集に他  
に1例ある。

○：慰むる こともあらむと 里人の あれに告ぐらく  
(安礼邇都具良久) 山びには 桜花散り かほ鳥の  
間なくしば鳴く 春の野に すみれを摘むと 白たへの  
袖折り返し 紅の 赤裳裾引き 娘子らは 思ひ乱れて  
君待つと うら恋すなり 心ぐし いざ見に行かな こ  
とはたなゆひ 〔萬葉十七・3973 池主〕

で、大伴池主が家持に贈った歌である。

漢文「曰」の訓読に「いはく…と」「いはく…といふ」の  
形があり、萬葉集にも九・1740に「告りて語らく…と言  
ひければ(告而語久…登 言家礼婆)」「言へらく…とそこら  
くに堅めしことを(答久…常 曾己良久尔 堅目師事乎)」  
がある。

3973歌は「告ぐらく」の内容が「山びには…うら恋す  
なり」で、呼応する結びのことばはない。

3303歌は「里人の…告ぐらく」を「人そ告げつる」で  
しめくくっており、この場合告げる主体を最後にもう一度出  
し、「人が告げた」ということを強調したものである。

4011歌は、「娘子らが 夢に告ぐらく」を「な恋ひそ  
よとそ いまに告げつる」でしめくくっている。最後が「そ  
ゝ連体形」になっている点は3303歌と似ているように見  
えるが、こちらは、告げる主体をもう一度出すことはなく、  
「そ」で強調したいのは娘子の語った内容全体である。33  
03歌より、こちらのほうが、一般の漢文訓読の形に近い。  
ここに「そ」が入っていることは、

○今所念久此位波避天覽間毛御体欲養止奈毛所念須。

イマオモホサク コノクラキハ サリテ シマラクノ  
マモ オホミミヤシナハムトナモ オモホス

『五十九詔 光仁天皇（北川和秀『続日本紀宣命  
校本 総索引』 吉川弘文館 昭和五七年）』

などの「なも」に匹敵するものである。家持は、十三・33  
03などの「そ」連体形をもとに、漢文訓読語の「なも」  
を、和文に用いる「そ」に置き換えて、この強調構文を考え  
たものではないか。

(3)

○秋田之 穂向乃所縁 異所縁 君尔因奈名 事痛有登  
母 [萬葉 二・114]

○秋田之 穂向之所依 片縁 吾者物念 都礼無物乎  
[萬葉 十・2247]

新大系の二・114注には、

◇第三句の原文「異所縁」は、「秋の田の穂向きの寄れ  
る片寄り（片縁）に我は物思ふつれなきものを」（二  
二四七）の上の句を参照して「片寄りに」と訓む。し  
かし、「異」をカタと訓む根拠は未だ明らかではない。  
とある。「異」をカタと訓むとして、第三句の「所」字を誤  
写と考えるならば、「片寄りに」でよいが、「所」字を尊重す  
るならば、「異所縁」は「片寄れる」と訓むほかはない。一  
方、「異所」をひとつづきのものと考え、「異所／縁」と考え  
れば、「異所」を「カタ」と訓むことができ、「異所縁」で  
「片寄れる」あるいは「片寄りに」と訓むことができる。た  
だし、従来、「異／所縁」で訓んでいるように、「異所／縁」  
の区切りは難しい。やはり、「異／所縁」で区切って訓みを  
考えるほうがよい。

「異所縁」を「片寄れる」と訓む場合、「片寄れる」は次

の「君」にかかり、「秋の田の稲穂がなびくように、ひたす  
らわたくしになびいていらつしやるあなたに、心を寄せまし  
よう。たとえ人言がひどくとも」ということになる。

(4)

記紀風土記では、助動詞キの未然形ケは以前のできごとの  
反実仮想の用例があり、セは以前のできごとの反実仮想と現  
在の反実仮想の用例がある。（拙稿「記紀風土記のツ・ヌ・  
リ・タリ・キ・ケリ」『京都語文21号』所収 2014年  
11月）

(5)

新大系注に、

◇第三句「恋ひにてし」は、「恋ひぬ」の連用形「恋ひ  
に」に助詞「て」と「し」が接続した形。「し」は歌  
末の「らしも」と呼応している。

全集注に、

◇恋ひにてし―ニは完了の助動詞ヌの連用形。シは強め  
の助詞。下のラシと呼応する。

集成注に、

◇恋ひにてし「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形。

「て」は接続助詞。「し」は強意の助詞。

とある。これは、前句が後句の原因・理由をあらわしている  
点で、

○川渚にも 雪は降れれし（雪波布礼々之） 宮の内に  
千鳥鳴くらし 居む所なみ [萬葉十九・4288 家持]

と同じ形である。4288歌について集成は、

◇「し」は係助詞で、第四句の「らし」に呼応する。

と言う。シを係助詞とするのは、新しい名づけである。呼応  
関係があるのであるから、集成の言うように、この場合のシ

を係助詞と認めてよい。

なお、

○可之布江に 鶴鳴き渡る 志賀の浦に 沖つ白波 立ち来らしも (多知之久良思毛) 一に云く、「満ちし来ぬらし」といふ。  
〔萬葉十五・3654〕

について、新大系の注に、

◇結句の「立ちし」、「一に云く」の「満ちし」の「し」は強意の助詞。「立ち来らし」「満ち来らし」を強めて言う。音数上の調整もあったであろう。「し：らし」の例、既出(三四〇・三四一・一四七六・二二一〇・三一四五など)。

と言う。3654、および340、341、1476、2210、3145は、主述関係や複合動詞の間にシが入るもので、上に掲げた句と句との関係のものとは異なるが、これらも呼応関係があるのだから、係助詞と考える。係助詞ソの例に、

○大和には 鳴きてか来らむ 呼子鳥 象の中山 呼びそ越ゆなる (呼曾越奈流) 〔萬葉 一・70〕  
○塩津山 打ち越え行けば 我が乗れる 馬そつまづく (馬曾爪突) 家恋ふらしも 〔萬葉 三・365〕  
○朝髪 の 思ひ乱れて かくばかり なねが恋ふれそ (名姉之恋曾) 夢に見えける

〔萬葉 四・724〕

のように、複合動詞の間にソが入るもの、主述関係の間にソが入るもの、原因・理由の前句と後句との間にソが入るものがあるのと、同じである。

(6) 記紀風土記の時代には、未然形ケ・已然形ケが認められる

ので、ケムを一語とせず二語と考えた。

萬葉集では、ケが認められないので、ケムは一語に成っていると考える。よって、ここにケムの用例は含めない。

(7) ○旅にして 物恋之鳴毛 聞こえざりせば (不所聞有世者) 恋ひて死なまし 〔萬葉 一・67〕

は、大系では

◎旅にいて「物恋之鳴毛」聞こえなかったとしたら、恋い焦がれて死んでしまっただろう。

と、以前のできごとの反実仮想。全集では、

◎旅先で 物恋之鳴毛 聞えなかったとしたら 恋い死んでいだろう

と、現在の反実仮想としている。集成は第二句・第三句を「物恋之伎尔鶴之鳴毛」と推定する説を採っていると見られ、  
○旅にして もの恋しきに 鶴が音も 聞こえずありせば 恋ひて死なまし

と訓み、

◎旅先にあつて、もの恋しい時に、鶴の声すら聞えなかったら、家恋しさのあまりに死んでしまうだろう。

と訳す。訓の確定しない部分もあるが、第四句・第五句の訳は集成のものがよく、セは現在の反実仮想と考える。

(8) キに疑問の助詞ヤが続くもの5例のうち

○故郷の 奈良思の岡の ほととぎす 言告げ遣りし (言告遣之) いかに告げきや

〔萬葉 八・1506〕

の「いかに告げきや」は「何如告寸八」と表記される。全集は、

◇疑問語はやと呼応せず、カと応ずるのが例。ここはイ

カニカツゲシとあるべきところ。

と言う。新大系は

◇「いかに。告げきや」と切る。「このころはいかにさきくやいふかし我妹」(六四八)の「いかにさきくや」が、「どうですか。元氣ですか」と言うのと同じ。

と言う。新大系に従う。

(9) 古くは「バ」「ドモ」のない已然形だけで、順接確定条件および逆接確定条件をあらわした。萬葉集巻第五・896

○：天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひて 勅旨 戴き持ちて 唐の 遠き境に 遣はされ 罷りいませ (麻加利伊麻勢)：〔萬葉 五・896〕

を、新大系は

◎：天下の政治を奏上なされた家柄の子息としてお選びになって、大御言を承って、唐の遠い境に遣わされて、下向なさるので、：

と訳しており、日本古典文學大系の頭注には、

◇已然形だけで確定条件を表わす語法は、奈良時代でもすでに古い語法。

と言っている(ただし、萬葉集には、管見によれば順接70例・逆接21例認められる)。

次に、萬葉集巻第七・1310

○雲隠 小嶋神之 恐者 目間 心間哉

〔萬葉 七・1310〕

を、全集が

○雲隠る 小島の神の 恐れは 目は隔てども 心隔てや

と訓むのに対し、新大系は

○雲隠る 小島の神の 恐れは 目こそは隔て 心隔てや

と訓む。意味は同じで、「目は隔たっているが、心は隔たっていない(逢わずにいるが、心は離れてはいない)」である。新大系の訓みでは「コソコソ已然形」になっている。この場合「コソコソ已然形」は、後に続いていく形になっている。「コソコソ已然形」を含む句がそこで終止する形のは、萬葉集中57例(＋「コソコソ形容詞連体形」4例)見られ、

○梓弓 末は寄り寝む まさかこそ(麻左可許曾) 人目を多み 汝をはしに置けれ(奈乎波思尔於家礼)

〔萬葉十四・3490〕

のように「今は人目が多いのであなたを端に置いているけれど」という逆接であるものと、

○妹が紐 解くと結びて 竜田山 今こそもみち(今許曾黄葉) そめてありけれ(始而有家礼)

〔萬葉 十・2211〕

のように「竜田山は、今こそ黄葉し始めているよ」という強調表現のものとがある。ここで強調されているものは、「今」であるが、そこからさらに、一文全体を強調するものにもなっていく。

歌が逆接表現で終止する場合、たとえば、モノヲで終止する歌も、「のに(実際はそうではない)」から「のに：」という溜息となり、希求さえもがむなししい詠嘆「ののだ」となるのであるが、確定条件をあらわした「コソコソ已然形」では、コソの強い指示の意味から強調表現となっていくものである。

(10) このケリは確認をあらわす。これは現代語で、



○お求めの品は、これでよろしかったでしょうか。  
の確認、に過去形と同じタが用いられることと照応するものである。

(11) これも、「こそゝ已然形」の本来の用法の一つで、現代語にもある用法である。「あなたがわたしを悪い僂んだからこそ、夢に現れた。」「あなたのことを思うからこそ、あえて言うのだ。」

「こそゝケレ」20例中、十五・3718の「家島は名にこそありけれ」のように、逆接で後文に続く例は1例で、あとは終止する形。

四・639の「かく恋ふれこそ」のように原因・理由の句をうけるもの4例、

○夜くたちて 鳴く川千鳥 うべしこそ 昔の人も 僂ひ来にけれ  
[萬葉十九・4147]  
のように「うべし」をうけて「なるほどそうだ」というもの2例、

○妹が紐 解くと結びて 竜田山 今こそもみち そめてありけれ  
[萬葉 十・2211]

のように「今」を強調するもの1例、

○朝顔は 朝露負ひて 咲くといへど 夕影にこそ 咲きまさりけれ  
[萬葉 十・2104]

のように名詞を強調するもの2例、

○我妹子が やどの秋萩 花よりは 実になりてこそ 恋増さりけれ  
[萬葉 七・1365]

のように連用修飾語を強調するもの1例、

○めづらしと わが思ふ君は 秋山の 初もみち葉に 似てこそありけれ  
[萬葉 八・1584]

のように「似ている」ことを強調するもの1例。

(12) このケリは気づきをあらわす。これは、現代語で、  
○今日は日曜日だった。

の気づき、に過去形と同じタが用いられることと照応するものである。

詠嘆の意味のケリは、奈良朝にはあらわれず、平安朝になつてあらわれるが、(注10)にも述べた

○お求めの品は、これでよろしかったでしょうか。  
の確認、および、

○ああ、よかった。

の詠嘆、に過去形と同じタが用いられることと合わせ、現代語のタは、古典語のケリの性格を受け継ぎ、含んでいる。